

## 地理A，地理B

### 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

#### 地 理 A

##### 1 前 文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は、大学（専門職大学，短期大学，専門職短期大学を含む。以下同じ。）への入学志望者を対象に，高等学校（中等教育学校及び特別支援学校高等部を含む。以下同じ）の段階における基礎的な学習の程度を判定し，大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的としており，この目的自体は，従前の大学入学センター試験（以下「センター試験」という。）と基本的に同様である。

一方，共通テストでは，平成21年告示高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）において育成することを目指す資質・能力を踏まえ，知識の理解の質を問う問題や，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっている。地理の問題作成方針にも，思考の過程に重きを置きながら，地域を様々なスケールから捉える問題や，地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり，資料を基に検証したりする問題，系統地理と地誌の両分野を関連付けて問題を作成すると示されている。

ここでは，本年度の問題について以下の視点から分析し，上記の共通テストの目的や趣旨が実現されているかどうかについて評価したい。

- ・問題内容・範囲は適切であったか。
- ・問題の分量・程度は適切であったか。
- ・問題の表現・形式は適切であったか。

##### 2 内 容・範 囲

第1問 日本の自然環境と防災に関する大問である。地形，気候，自然災害，防災に関して，基礎的な知識・技能とともに思考力・判断力が適切に問えている。

問1 地形図から地形や河川の流水方向等を読み取る問題。③の「地面上の距離」は知識の質を問おうとしているのだろうが，かなり細かな知識であり適切ではない。

問2 暖候期の降水量と平年比を示した図を読み取る技能の問題。

問3 日本の主な気象災害をまとめた表を読み取る学習場面を想定した問題。

問4 霞堤を示した図を読み取って，その機能や課題を推察する思考力を問う問題。霞堤について学習していなくても解答可能ではあるが難易度は高い。

問5 自宅周辺の防災地図（簡略化したハザードマップ）を読み取って，避難のあり方について推察する判断力を問う問題。読み取った結果からどのように判断して避難行動に活かしていくか，その筋道が明確に示されており良問である。

問6 これまでの設問を総合して，地域の防災を考える上での注意点を推察する思考力・判断力を働かせて解答する問題。ハザードマップは万能ではないことに気づかせる良問。

第2問 世界の生活文化の多様性を食文化と異文化理解・多文化共生について探究する授業の場面を想定した大問。基礎的な知識・技能とともに思考力等が適切に問えている。

問1 主な食べ物の分布を問う知識の問題。知識の程度は基礎的である。

- 問2 食べ物の調理法と食べ方を問う知識の問題。一般常識で解ける程度であり、地理Aの問題としては適切ではない。
- 問3 米を主な食べ物としている地域の地図と米の統計を読み取って考察する問題。表2を丁寧に読み取らなくても、常識で解けてしまう点が惜しい。
- 問4 アンデスの高地に暮らす人々の写真を読み取って、人々が着ている衣服の特徴をその背景にある自然環境から考察する問題。基礎的な知識・技能から思考力を働かせて考察する良問。
- 問5 単に「シエスタ」「ラマダーン」などの用語を問うのではなく、生活習慣の背景にまで遡り知識の理解の質を問う工夫がされている。
- 問6 単なる異文化理解を超えて、宗教の視点から多文化共生の取組みの理解を求めている。使用されている写真それぞれが、特徴をとらえた分かりやすく適切なものとなっている。
- 第3問 ある高校生が夏休みを利用して、ヨーロッパ在住の親戚と東ヨーロッパを旅行するという場面が設定されている。旅行の行程を辿りながら、東ヨーロッパの自然環境や生活・文化、産業などを問う大問である。
- 問1 ヨーロッパの3地点における雨温図の判別問題であるが、選択肢に高山地域が含まれるのは珍しく、思考力を問えるように工夫された問題である。
- 問2 三つの河川沿いの地域における宗教分布を考察させる問題。河川沿岸という視点での考察は目新しく、よく工夫されている。
- 問3 三つの条件を満たす場所を、地図とグラフから推察させるという興味深い設問形式である。よく練られた問題であるがゆえ、受験者には難しく感じられたのではないか。
- 問4 ブルガリアを手掛かりとして、西ヨーロッパと東ヨーロッパ（旧社会主義国）の経済状況の相違から考えさせる問題。シンプルなグラフであるが、思考力を求められる。
- 問5 「ママリーガ」、「ミティティ」ともに馴染みの薄い料理であるが、説明文が工夫されており判別材料としては十分である。初見の資料と、自分の思考力とを結び付けて考察する問題。
- 問6 各国の経済活動が反映される窒素酸化物排出量と、ヨーロッパの気候的特徴である偏西風の概念とを組み合わせさせて考察する問題。
- 第4問 地球的課題から、資源・エネルギー、食料、人口、都市・居住の諸課題についてバランスよく出題されている。様々な資料から読み取ったことと、知識等を組み合わせる思考力・判断力等を発揮して解答する問題から構成されている。
- 問1 二酸化炭素量の削減に関して、3か国における化石燃料による発電量の割合変化を考察させる問題。カナダの水力発電の大きさ、イギリスの再生可能エネルギーへのシフトという知識を必要とする判別問題である。
- 問2 地図と文章から、「地熱発電」と「風力発電」の特徴を読み取らせる工夫された問題である。各発電方式の背景にまで遡り、知識の理解の質を問っている。
- 問3 食料に関わる問題を解決する方法について、その取組みの事例が適切かどうかを問う知識の問題。
- 問4 合計特殊出生率と乳児死亡率の経年変化を示したグラフから、先進国、新興国、途上国の特徴を踏まえて考察する問題。
- 問5 発展途上国におけるスラムの発生・拡大のメカニズムについてまとめた模式図から、因果関係について思考力・判断力を働かせて解く問題。
- 問6 20世紀以降の先進国における大都市の空間的な拡大過程を示した模式図から、各時期における都市問題を考察する問題。都市問題の事例として扱われる様々な現象の知識に偏らず、時系列的に都市問題の変化をとらえることができるような指導方法の工夫が問われる良問

である。

第5問 福岡市の地域調査に関する大問。福岡市に居住する高校生が、他地域の高校生に自らの居住する地域の特色について紹介するという場面設定がなされている。全体として地方中心都市の持つ機能について考察させる構成となっている。

問1 地理院地図の空中写真から地形および土地利用の様子を判読する問題。

問2 人口集中地区と福岡市への通勤・通学率を示した主題図を読み取る技能を問う問題。本問では高校生がGIS(地理情報システム)を活用して主題図を作成する場面設定がなされており、今後、高等学校での授業においてGISを一層活用することを示唆するものと考えられる。

問3 福岡市の産業の特徴について、会話文を参考にして全国との違いについて考察する問題。地方の中心都市のもつ機能を考察させる設定であるが、中心地機能の判定は国語の読解力を問う問題のようになっており、かえって受験者が戸惑ったと思われ、工夫が求められる。

問4 福岡都心から郊外に向かっていく際の景観写真の資料をもとに、都市の内部構造について人口増加率と老年人口増加率の経年変化から考察する問題。

問5 地理院地図を用いて、埋立地の土地利用の特徴について読図する問題。本問で問われている内容は、図3が示されていないなくても常識的に解答することが可能であり、資料活用という点で出題に工夫が求められる。

問6 日本の人口移動について、福岡市への転出入の状況を主題図から読み取って考察する問題。

### 3 分量・程度

第1問 大問全体としては標準的な難易度の設問で構成されているが、問3は霞堤についての学習経験の有無に左右される恐れがあり、さらに工夫をお願いしたい。設問数や分量、文字数は試験時間に照らして適切であった。

第2問 大問全体として標準的な難易度の設問で構成されているが、一部に常識だけで解けてしまう易問もある。学習成果がより正確に測れる問題作成をお願いしたい。設問数や分量、文字数は試験時間に照らして適切であった。

第3問 題材が東ヨーロッパということと、出題形式の工夫された設問が多かったので、大問全体としてはやや難易度が高かった。問2は河川沿岸という視点での考察が目新しく、選択肢も6択であることからやや難易度が高い。また、問5では食べたことのない料理に戸惑った受験者もいたと推察される。設問数や分量、文字数などは、試験時間に照らして適切なものであった。

第4問 大問全体として標準的な難易度の設問で構成されている。問6は先進国における都市問題について、それぞれの現象についての個別の知識のみではなく、その因果関係についての理解の質までを問えている。設問数や分量、文字数は試験時間に照らして適切である。

第5問 すべての問題が様々な資料を活用して地域を総合的に考察する形式であったが、一部資料を活用しなくても知識のみで解答できる問題もあり、難易度は平易である。一方で問6では統計指標が目新しく、主題図の読み取りに戸惑った受験者がいたと推察される。

### 4 表現・形式

第1問 場面設定の大問ではないが、自然環境から地域の防災を考察する授業の流れが再現されており、適切である。資料2中の小学校と自宅が敷地(建物)を示すのか、単に場所を示すのかはつきりせず、誤解した受験者もいたのではないかと推察される。

第2問 生活文化の多様性について、食文化、異文化理解・多文化共生を探究する学習場面が設定されている。実際に同じような流れの授業展開が想定されることから適切である。問3は問

1で用いた図1が再び登場する目新しい設問形式であったが、一つの資料を複数の場面で使用することは、資料の深い読み取りや別の視点での気づきにつながる可能性もあり、適切である。

第3問 高校生が夏休みを利用してヨーロッパ在住の親戚を訪ね、一緒に東ヨーロッパを旅行したという場面が設定されている。これは問題作成方針に沿っており適切である。問2・問3は設問形式が目新しく、工夫されている。問5で用いられた写真は分かりやすく、興味を引くものである。多くの情報が書き込まれた図1の地図は、もう少し大きい方が受験者に親切である。

第4問 場面設定の大問ではないが、地球的課題全般からバランスよく出題されており適切である。問5では模式図の活用により知識を問うのみではなく、思考力・判断力を働かせて考察する学習の場面を設定しており、作成方針に沿っている。

第5問 高校生が自分の居住する地域を調査する場面が設定されている。使用されている地図は地理院地図であり、実際の授業におけるコンピュータ上で閲覧可能な地図の活用について示唆するものと思われる。問6の主題図は小さな円のハッチの判読が難しいため、改善をお願いしたい。

## 5 ま と め（総括的な評価）

共通テスト(1)の問題と同様に、共通テストに課せられた「知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題」を重視するという意図が、反映された作問となっている。小問一つ一つに資料や情報が多く盛り込まれるようになった分、小問1問に要する解答時間はセンター試験より伸びているため、全体の設問数は削減されている。全体的な難易度は適切であったと思われる。

「地理A」は受験者が少ない上に、幅広い層の受験者が受験するため、作問における難易度の調整はかなり難しいと考えられるが、これからも総合的に地理的な見方や考え方を働かせて解く問題や、真摯に学習に向き合った受験者の努力が反映されるような良問の作成が望まれる。

今後のさらなる改善に向けて、引き続き次の3点を踏まえた作問をお願いしたい。一つ目は、「地理A」では作業的、体験的な学習を重視し地理的スキルを高めることが学習のねらいの一つであることから、細かな知識や概念は避けた問題作成とすること。二つ目は、単調な出題形式を避け、図表の単純な読み取りだけでなく思考を伴う問題となるような工夫や、図表はあるが関連性が薄く選択肢だけで解答できる問題にならない配慮をすること。そして三つ目は、地域調査に関する問題作成では、受験者への平等性の確保の観点から、今後も出題形式の工夫をすることである。

センター試験を引き継いだ共通テストが高等学校現場に与える影響は、これまで以上に大きいといえる。センター試験が回数を重ねる中で、知識偏重から思考力・判断力・表現力等に重点を置いた問題作成となってきたことで、高等学校の授業も知識伝達型の授業から生徒の主体的な学びを促す授業へと変化してきた。本年度の共通テストでは、その傾向はより鮮明になっており、高等学校の授業もなお一層の工夫が求められることになった。さらに、新教育課程において「地理総合」が必修となることを踏まえ、引き続き質の高い出題を期待している。

最後に、共通テスト1年目という難しい年に問題作成に当たられた諸先生方の御努力に深く敬意を表したい。

## 地 理 B

### 1 前 文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は、大学（専門職大学、短期大学、専門職短期大学を含む。以下同じ。）への入学志望者を対象に、高等学校（中等教育学校及び特別支援学校高等部を含む。以下同じ）の段階における基礎的な学習の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的としており、この目的自体は、従前の大学入学センター試験（以下「センター試験」という。）と基本的に同様である。

一方、共通テストでは、平成21年告示高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）において育成することを目指す資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっている。地理の問題作成方針にも、思考の過程に重きを置きながら、地域を様々なスケールから捉える問題や、地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題、系統地理と地誌の両分野を関連付けて問題を作成すると示されている。

ここでは、本年度の問題について以下の視点から分析し、上記の共通テストの目的や趣旨が実現されているかどうかについて評価したい。

- ・問題内容・範囲は適切であったか。
- ・問題の分量・程度は適切であったか。
- ・問題の表現・形式は適切であったか。

### 2 内 容・範 囲

第1問 世界の自然環境と災害に関する大問。探究活動という場面設定のもと、災害をテーマの中心に据えて、関連する自然環境などの基本事項が幅広く出題されている。多様な資料を読み解き、基礎的な知識・技能に基づいて、地理的な思考力を発揮しているかを問うている。

問1 土砂災害の発生要因について、仮説を立て検証するという形式の問題。地形断面図から山脈の位置と地形的特徴を読み取り、その地域のプレート境界の特徴を問う基本的な知識問題である。

問2 2地域の1月と7月の土砂災害発生地点の違いについて、気圧帯の季節変動や季節風など降雨に関わる基本的な知識を基に考察する問題。

問3 黄河から海への土砂流出量の変化を示した図を読み取り、その背景と影響を考察する問題。長期的な時間軸を通して、人間生活と環境との関わりを、農業、地域開発、環境保全などに関する幅広い知識から総合的に考察することが求められる。

問4 森林分布の特徴について、森林の粗密をもたらす地形、気候、植生などの様々な事象の理解を基に、各地の自然環境を多面的・多角的に考察していく良問。選定された四つの地域は、それぞれ森林の密な地域と疎らな地域を組み合わせ一つの地域として扱うというユニークな地域設定である。

問5 森林の種類別に炭素量を示した資料から森林の違いを考察するという問題。初見の資料を丁寧に読み取り、植物や土壌の特徴についての知識を使って思考する問題である。「森林の炭素量」という高校地理ではあまり扱われない指標が使用されたため、判断に苦慮する。

問6 時事的な話題である森林火災を題材にした問題。カナダにおける森林火災に関する資料を基に考察した会話文の空欄補充で、会話文の前後の文脈を把握する読解力が必要である。

第2問 産業と貿易に関する大問。産業に関する一連の問題では、農業立地の概念的な理解から現実社会における作物ごとの立地の特性や要因の違いについて思考を深めていく構成になっている。解釈に時間を要する初見の図を読み取る技能、知識の理解の質や思考力等をバランスよく問うている。

問1 都道府県別人口と産業別就業者数の関係を示した三つの図から各産業を特定する問題。産業の特性を図から読み取り、知識と組み合わせて考察することが求められる。

問2 市場からの距離と農業地域の形成を説明した仮想のモデルとそれに関する条件や説明文を解釈した上で、農業立地の特性を概念的に理解できるかを確認する問題で、次の問3につながる。

問3 問2を踏まえて、現実社会における市場からの距離と作物別の収益性との関係を考察する問題と、対象都県の農地面積に占める田、畑、樹園地構成比の図を判別する問題との組合せである。中学校で学ぶ日本地理の知識も必要である。解釈に時間がかかり判別も苦慮する2種類計六つの図を読み取る必要があるが、地理的な見方や考え方を働かせているかを問う良問である。

問4 世界各地の産業の立地を、市場からの近接性という視点を軸に判断する知識問題である。

問5 1人当たりGDPと輸出依存度から四つに分類した表中の国と、各国からの日本の輸入品目を組み合わせて国を判別する問題。各項目の該当国を特定する際に、経済発展の度合いや外貨を稼ぐことができる資源・産品があるかなど、多面的・多角的な思考を必要とする良問である。

問6 米韓中の訪日観光客数と1人当たり旅行消費額等を示した図から、3か国と一部の指標を特定する問題。日本との近接性や滞在日数などの各国旅行者の特性を多面的・多角的に考察する必要がある。

第3問 人口に関する諸事象の地域性、円村、都市についての様々なスケールにおける地理的事象を問う大問である。多様な資料を読み取る技能、知識を組み合わせる思考する力を問うている。

問1 老年人口率に関する図から、高齢化の進行の特徴を各国の状況を検討しながら考察し、国を特定する問題。シンプルな出題形式で、選定された国も特徴の違いがわかりやすい。

問2 女性の年齢階級別労働力率を示した図から、3か国を判別するシンプルな出題形式の問題。各国の女性の社会進出や社会保障の実情などの知識を踏まえて考察する力が求められる。

問3 Googleマップの写真に示された円村について、分布と形態の利点を問う知識問題。

問4 国名が伏せられた3か国の都市人口率の高低や推移の図を読み取り、説明文から各国の社会経済状況を把握して、両者の関係性を考察する問題。各国地誌の知識も必要で、系統地理と地誌の両分野を関連づけた出題である。多分野の知識とともに多面的・多角的な思考力を問うている。

問5 大都市における鉄道網の図を手掛かりとして通勤手段別の二つの図を判別し、さらに交通網や通勤手段と人口流動との関連を、図の読み取りに基づいて考察できているかを問う良問である。

問6 県庁所在地中心部の3種類の施設の分布をそれぞれの立地特性から考察する問題。地図を用いて視覚的に思考させる形式ではあるが、選定された施設は分布数からある程度判断できてしまう。

第4問 西アジアの地誌およびトルコとモロッコの比較地誌に関する大問。自然、産業、文化、時事的な問題がバランスよく盛り込まれ、基本的な知識に加えて、思考力等を適切に問うている。

- 問1 西アジア4地点の気候を, 1月と7月の月平均気温と月降水量を示した図から, 地点を特定する問題。乾燥帯内での気候判定も必要なため, 緯度, 隔海度, 標高など多くの気候因子を組み合わせて考察する必要がある, 気候に関する理解の質や順序立てた思考ができるかがよく測れる良問である。
- 問2 水資源の確保に関するGoogle Earthの景観写真を読み取り, 撮影地点を特定する問題。各地点の自然環境や灌漑方法, 各国の経済状況などの基本的な知識を問うている。
- 問3 西アジア諸国を1人当たりGNIと1日当たり原油生産量から4グループに分け, 各国が属するグループを特定する問題。象限で分けられた図を使用することにより, 各国の人口, 経済状況, 原油生産量などの知識を多面的・多角的に考察して解答しているかを測ることができる良問である。
- 問4 ドバイの人口推移と人口ピラミッドを基に人口増加の要因を示した文を選択する問題。産油国への出稼ぎ労働者に着目した素材の資料は興味深い, 基本知識で解くことができる。
- 問5 トルコとモロッコにおけるナツメヤシと豚肉の1人当たり年間供給量の表から, 国と品目を特定する問題。両国の位置やナツメヤシ栽培地域に関する詳細な知識を用いて推論する力を問うている。
- 問6 ヨーロッパ各国に居住するトルコ人, モロッコ人の数を示した地図とトルコとモロッコの受け入れ難民数の推移を示した図からモロッコに関する資料を特定する問題。人口の国際移動の背景について, 国家間の歴史的関係や地理的近接性など, 多面的・多角的に考察できているかを問う良問である。
- 第5問 福岡市とその周辺の地域調査を高校生が行うという場面設定の大問。地域調査に必要な様々な手法が用いられた設問から構成され, 地域の特性を全国と比較するという重要な視点もある。
- 問1 飛行機から撮影した三つの景観写真の撮影地点を地形や土地利用などから読み取る問題。
- 問2 GISにより人口集中地区の分布と福岡市への通勤・通学率を示す主題図を作成し, その重ね合わせで推察できることがらを選択する問題。GIS活用の基本的な考え方を駆使する良問である。
- 問3 地域調査における聞き取り調査の結果を基に, 福岡市と全国の産業別就業者数の上位3業種を比較して, 地方中心都市である福岡市の性格や役割を考察する問題。空欄補充の選択肢は, どちらも福岡市の特性を表しているため, 文脈の中で判断する必要がある。
- 問4 景観写真に示された市内各地の人口増加率および老年人口増加率を推察する問題。都心からの距離を念頭に人口現象を多面的・多角的に考察する問題。老年人口率でないことに注意が必要である。
- 問5 地理院地図の読み取りをした生徒の会話文の正誤を判断する問題。これからの地図学習の方向性が示唆されている。ただし, 判断すべき会話文の正誤は常識的に判断でき, 図がなくても解ける。
- 問6 福岡市と各都道府県間の人口移動に関する統計地図を読み取った文の正誤を判断する問題。図形表現図の図形が小さく見づらいが, 選択肢の文だけでも判断が可能である。

### 3 分量・程度

- 第1問 全体的に問題文の文字数, 資料の情報量がやや多めの大問であるが, 問題の場面設定の関係上, 適切である。問5は初見の資料に加えて, 「森林の炭素量」の理解が必要で難問。大問全体の難易度は標準からやや難しめである。

第2問 問1から問3は資料の情報量がやや多めで、解答に時間を要すると思われるが、難易度は標準。問5は、受験者がそれぞれの国について必要な知識や情報を持ちあわせていないと判断が難しい問題になりうる。全体として標準的な難易度で、設問数、文字数ともに適切である。

第3問 標準的な難易度の設問で構成された大問。設問数、文字数ともに適切である。問6は、受験者にとって生活実感のある公立中学校とコンビニエンスストアから判断が出来るので、4点問題ではあるが易しめの問題と言ってよい。

第4問 図や写真の情報量が多いが、難易度は標準的である。そのため、試験時間内で解答できる設問数、文字数となっている。問5は、地中海に面した両国の位置や気候などの知識から、明確な違いを導き出すことがやや難しい問題である。

第5問 地図や写真、統計資料などから地域の特徴を理解し解答させる設問から構成されており、設問数は適切である。また、標準的な難易度である。しかし、高校生が調べたり、まとめたりする地域調査を取り上げているため、文字数がやや多くなっている。

#### 4 表現・形式

第1問 世界の自然環境と自然災害をテーマにして、探究学習を外部機関と連携して学習を深めていく過程が各小問で問われている。問題を解きながら、探究学習において実際に起こりうることや学習の手順などを再現している点において、場面設定として適切である。

第2問 前半の小問は各産業の立地論を扱っており、問題構成に連続性がある。大問を通して思考力、判断力を問うための図表が効果的に用いられている。問3は、両対数グラフが使用されているが、受験者全員が学習しているとも言えず、やや難しい。問6は、コロナ禍で国内外の人の移動が大幅に制限された現在にあってやや違和感をもつが、問題文中にも2017年の資料とあり、受験者に配慮した出題がなされている。

第3問 この大問は、国、都市、村落と異なるスケールを扱って出題されている。大問全体を通して、文章表現、用語、図表や写真は、いずれも適切である。問1は、それぞれの国の歴史や経済発展の度合い、医療水準など国全体を多角的に考察し、比較させるように作問されている。問3ではGoogleマップが使用されており、実生活と馴染みの深い資料が使われている。

第4問 西アジアを地域に選定した地誌の問題。この地域を取り上げた地誌の授業展開のような構成である。いくつかの小問は、昨年までの比較地誌の大問を受け継ぐような問題となっている。問2は、Google Earthが使用されている点が目新しい。問3の図3は見慣れない形式であるが、問題作成の方針に沿ったものである。全体を通して、この地域の地誌的分野の力を測る問題として適正である。

第5問 この大問は、福岡市とその周辺の地域調査を題材としており、学習の過程を意識した場面設定となっている。大問の性格上、写真を多く使用しているが、いずれも鮮明で判断しやすいものである。しかし、問6の図4に使用されている図形表現図は、小さい数値の府県が読み取りづらく、例えば、棒グラフを使って表すなど表現方法を工夫していただきたい。

#### 5 まとめ（総括的な評価）

全体として、系統地理の各分野について幅広く問う内容となっており、事例として取り上げられる地域についても偏りが無い。知識・技能、思考力・判断力・表現力等をバランス良く問える問題構成となっており、センター試験と比べてもその差は歴然としている。共通テスト(1)と比べ、知識を問う問題、知識があることで解きやすくなる問題がやや多いが、知識の理解の質を問うたり、知識を活用して判断させたりしており、単純な暗記量のみで頼ることがないよう工夫されており、全



体のバランスはとれている。学習を積んだ受験者にとってはシンプルで解きやすかったと考えられる。

分量・程度については、文字数、資料数ともに多く、資料のほとんどが受験者にとって初見となり、読解に時間を要するため、設問数は30問で適切である。難易度も全体を通しては標準的なものとなっているが、用語や資料の理解が地理の受験者にとって難しいものもみられた(例: 1－5 5，2－3 9など)。思考力・判断力・表現力等を問う上で、初見の資料が用いられることは歓迎されるが、地理的な要素以外の部分で判断に苦慮することがないように、工夫していただきたい。

表現・出題形式については、探究的な学習活動や地域調査などの場面設定のもと、適切かつ多様な資料が用いられ、思考力・判断力・表現力等を幅広く問えている。中でも第2問の間2から間4にかけて「市場との関係性」を軸として関連性の高い問題が配置されるなど、場面設定こそされていないが、高等学校における授業展開において大いに参考になるものである。また、センター試験に比べ地誌に関する出題数が減っているところであるが、第4問では各設問が関連性を持つ問題配置とすることで(問1と問2，問3と問4など)、動態地誌的な思考を促す形式となっており、更にBパートの比較地誌にも自然な流れで繋がっており、充実した内容となっている。

以上のことから、高等学校の授業において、知識・技能を身に付けさせた上で、いかにそれを活用し考察させるか、一層の工夫が必要になる。

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ① 日本地理教育学会

(代表者 井田 仁康 会員数 約500人)

TEL 042-329-7729

## 地 理 A

### 1 前 文

今年度から「大学入学共通テスト」が実施された。昨年度までの大学入試センター試験「地理A」科目で出題されてきた、現代社会における諸課題やグローバル・地域的な視座に立った諸事象、さらには地図を用いた地理的技術の習得などの内容が、今回の新テストにおいて、どのようなかたちで反映されているのかについて、総合的に検討・評価を実施した。また、新しい出題方法や内容の有無などについても着目した。

### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 これまで、地理的基礎として第1問は出題されてきたが、日本の自然環境と防災がテーマとして取り上げられた。ある意味で地理総合の内容を先取りしたものといえる。地理的知識を直接たずねる問題は少ないが、きちんとした理解がないと答えられない形式になっており、比較的良問が多い。

問1 地形図読図問題。短文③では地図上25mmの地表面距離の正誤をたずねる短文問題である。この問では高低差を考慮した距離と水平距離は大きく異なることから誤文と判断している。しかし一般的には地表面の距離とは、回転楕円体とみなしたときの距離であり高低差は考えないのはいか。「地点cから地点dまでを見通したときの距離」というような表現の方が誤解を招かないのではないだろうか。

問2 統計地図の基本的な読み取り問題である。きちんと読み取ることができれば難しくない。

問3 理科年表の資料から読み取る問題である。資料を扱う際の留意点に関するスキル問題に落とし込んでいる点は評価できる。

問4 連続堤と比較させながら、震堤の仕組みや長所などの理解を問うている。2019年の千曲川の氾濫においても話題となっており、時事的な問題ともいえる。レベルは標準的である。

問5 仮想的なハザードマップで避難のあり方について問うている。近年、地図を用いて防災対策を考える訓練(DIG)が注目されているが、この問題は、時宜を得た意欲的な問題といえる。

問6 問1～問5を踏まえ問6を解答する設定になっている。改めて全体の流れを振り返らせる構成となっている点は、地理学習は様々な事象を総合的に思考することを目指している点ともつながり、好感が持てる。

第2問 世界の生活・文化に関する大問。ストーリーを立てての出題であり、分布図、統計資料、写真を用い、多面的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢は評価できる。一部の設問に資料の扱い方に改善が求められるものがみられた。また、全体的に難易度が低い設問が多かった。

問1 常識的な知識があれば容易に解答できる。この知識の上に立って出題が望まれる。

問2 常識で解答できてしまう。問の立て方に工夫がみられるものの、大学入試として適切な

レベルかやや疑問。

- 問3 表2にはアジア以外の国がないが、図1から①は誤りであると判断する。「限定されている」が「多い」になると正解になるという点がやや気になるところである。一方で、②や④の判断には、図1と表4以外の知識を必要とする。知識自体はいずれも基本的であり、色紙を基に推論するという共通テストの出題方針とも合致するが、ややとまどうかもしれない。標準的なレベルの問題である。
- 問4 基礎的な知識を問うている。ただ、もう少し人物をクローズアップした写真を使った方が、衣服の特徴がはっきりして解答しやすいのではないだろうか。
- 問5 各地域の生活文化に関する問であるが、①は自然現象にのみに下線があり、それが正解なのがやや気になる。問題のレベルとしては基本的である。
- 問6 それぞれの写真は鮮明で、撮影対象もキャプションの説明をよくとらえており、解答しやすい。常識的な問題であり、日ごろの学習成果を図るという意味ではひと工夫がほしい。
- 第3問 ヨーロッパに関する問題である。各地を旅行するという設定で出題されており工夫がみられる。写真や地図、グラフといった資料を活用した出題で、気候、宗教、地形、環境問題について、基本的な内容を幅広く聞く問題となっている。
- 問1 アとイの雨温図で解答可能なので解答には問題ないが、ウの雨温図にはやや疑問が残る。気温の状況から高山にある＝スイスに位置すると判断するのであろう。ただAの地点はアルプスでも北のはずれに位置していることや、降水量が多いことなどで、戸惑うかもしれない。
- 問2 宗教分布を河川に沿ってみるといのは新しい出題方法で工夫されている。基本的なレベルである。
- 問3 図から短文の条件を満たす場所を解答する。工夫された良問である。
- 問4 工夫された出題であるが、本文をよみ、図をみれば、常識的に解答できるので、大学入試としては容易だと思われる。
- 問5 写真を基にした問題であるが、写真をみなくても解答可能。逆に言えば写真だけでは判別することが難しい。写真の使い方には工夫が必要。内容は歴史的背景などのかかわりも記されており望ましいものである。
- 問6 2つの分布図の違いをみて要因を考える問題。空間的思考力を問う問題として工夫されている。文Pは地図から類推できるが、地形を示した地図がないので文Qが誤りであることの確証は得にくい。もっとも、ヨーロッパの大まかな地形は基礎的な知識ということが前提で作問されたのであれば問題はない。
- 第4問 地球的諸課題に関する問題。表や地図、グラフ、模式図を活用した出題で、エネルギー問題や人口問題、都市問題など幅広く内容を問うている。大問全体としてのレベルはやや容易である。
- 問1 化石燃料による発電量の推移に関する問題。再生可能エネルギーの割合を増やすヨーロッパのイギリス、水力発電が盛んなカナダについて把握していれば解ける問題。基本的なレベルの問題。
- 問2 地熱発電と風力発電の上位国分布と、それらの発電形態の課題を問う問題。それぞれの発電形態を把握していれば解ける問題で、基本的なレベルの問題である。
- 問3 食料問題に関する文章の正誤問題。単純な4択問題であり、適当でない部分も明確であるため、もう一工夫ほしい問題である。基本的なレベルの問題。
- 問4 合計特殊出生率と乳児死亡率の推移から国名を推定する問題。ヨーロッパの国々では近年合計特殊出生率が持ち直していること、発展途上国では乳児死亡率が高いことを把握して

いれば解答可能。基本的なレベルの問題。

問5 発展途上国でのスラム発生・拡大に関する模式図の空欄補充の問題。矢印の前後を読み解くことで解答できる基本的なレベルの問題。共通テスト(1)地理Aの第4問 問5でも同様の出題形式がみられ、今後の大学入学共通テストの傾向となるのだろうか。模式図全体を活用するほか、探究学習の位置づけとするなど、出題方法にもう一工夫欲しい。

問6 都市化の模式図を用いて、該当する地点・時期の都市問題を選ぶ問題。工夫された出題である。基本的なレベルの問題。

第5問 従前からの地域調査に関する出題であり、「地理A」・「地理B」の共通問題であることも変わらない。センター試験の時から傾向はあったが、今回さらに「地図とGIS」が意識された出題となっている。GISの進展による地図の自在な利用活用が可能になっているという背景があるが、このことは、学習の場においても「地図とGIS」をより意識したものとなることが要求されるということでもある。第5問全体構成としては、地域調査についての必要な技能（地図と現地との照合技能，地図化技能，聞き取り技能，景観読み取り技能，地形図読図技能）が順に明確に示され，最後の小問で発展的な問いかけをすることで地域調査全体をまとめとすることで，単なるテスト問題にとどまらず一連の地理学習の流れともなり，全体としても良問に仕上がっている。

問1 空中写真と斜め写真を照合せる出題。地理の学習は紙上での議論だけで終始しては実用に繋がらない。学習が現実へつながるかどうかが重要な観点であり，そのポイントが地図と現実との照合である。このように現地の様子（垂直方向以外からの画像）と地図（垂直方向からの画像）との照合を読み取る技能については形を変えてほぼ毎年出題されている。また，最初に置かれていることから，この一連の学習の中で最も基礎的な技能として考えられていると見ることができる。今後も必須の出題としてほしい。

問2 見える事象（交通路など）を表した一般図的な地図と，見えない事象（統計）を表した主題図的な地図を比較対照させて読み取る出題である。GISの進展によって，このような地図は授業の中でも十分に作成していくことも可能となってきている。こうした問題の解答を通じて逆に述べたいことを表現するような地図を作るにはどうしたらよいか，という作図の観点も促進されるだろう。

問3 地域調査の重要な技法の一つである聞き取り調査についての出題である。次期学習指導要領においても地域調査は重要な学習項目となっている。このような出題を継続することで，地域調査の重要性を示すこととなり，授業での実施が促されよう。

問4 景観の読み取りも重要な技法の一つである。問1で地図との照合についての技能を問うた後は，その現実の具体的な内容についての読み取りである。ここでは，統計数値との関係を聞いている。都市圏における景観の移り変わりについての読み取りであるが，三大都市圏ではないところでの出題がとても興味深く，工夫を感じる。良問である。

問5 地形図が地理院地図として利用できるようになり，さらに地理院地図がパソコンだけではなくスマートフォンでも自在に利用できるようにもなり，地形図情報は誰でも身近に得られようになった。このことは，地理の学習が，学校での授業という枠組みを超えて日常へも浸透していく大きなチャンスでもある。「地理A」では第1問とともに第5問でも出題されており，複数個所での出題の意義は大きい。

問6 解答形式は文章の正誤を問う4択形式の単純なものであるが，福岡の地域調査といういわゆる大きなスケールの話から，日本全体の統計地図とからめて隣接県，九州地方，三大都市圏へ，というようにスケールを少しずつ変化させながら考察させるという出題方法は，

地理学の重要な観点でもあるスケール変化を利用した出題となり，良問である。

### 3 ま と め

今年度の「地理A」の出題内容および難易度設定は標準的であり，適切であったと考える。第1問では日本の自然環境と防災がテーマとして取り上げられ，「地理総合」の内容が先取りされたかたちとなった。設問内容では，しっかりとした知識・理解が求められており，良問であった。第5問の地域調査では，スマートフォンなどの情報通信機器の普及にともない，生活環境でのデジタル地図の利用が進んでいることを反映し，設問に地理院地図や各種図表などが多く取り入れられていた。さらに，大問全体を通して地域の様相を総合的に把握させようとする出題者の意図が伺え，良問と言える。

一方で，設問の選択肢設定が単純であり，正解が容易に導けてしまうものや，資料の活用方法に改善を求めたい設問も散見された。第2問のような生活文化を扱う場合，知識のみを扱うと「常識」的な問題か，逆に重箱の隅をつつくような問題になりがちである。今回は，授業で場面を想定したストーリーが考えられた上に，地図や写真を扱うなどの工夫がなされており評価はできるものの，問いそのものは常識的なものが多く，日ごろの学習成果を図るという意味ではさらなる改善が必要であろう。

時代が大きな転換点を迎え，求められる知識や地理的技能も日々変化してきている。そうした時代のニーズと生徒たちが日々習得してきた「学び」が，高次で融合するような意欲的な問題制作を今後も期待したい。

## 地 理 B

### 1 前 文

今年度の「地理B」の出題は、世界の自然環境と災害、産業と貿易、人口と村落・都市、西アジアの地誌、地域調査と5題の大問で構成された。昨年に比べ大問が1つ減少し、問題数は5問減の30問であった。共通テストとなり、複数のデータから考えさせる設問や、データを読み取り会話文の正誤を判断する設問等、解答に時間を要する設問が増えたためと考えられる。昨年同様、単純に知識を問うのではなく、主題図・グラフ・統計資料・景観写真等を用いて多面的に地理的思考力を測ろうという姿勢は評価できる。日頃の地理学習の成果が試されるこのような形式の問題を今後も継続して出題していただきたい。

### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 世界の自然環境と災害に関する問題で大問が構成されている。自然地理に関わる知識問題が減少し、データを読み取る力を問う問題が多くみられた。B大問は探究的な問いに仕上がっている。図1は土砂災害発生地点を示す点描図である。面積が異なれば発生地点の粗密イメージが異なってくる。正積図法で示して欲しい。分布図は正積図法で示すことはしばしばセンター試験でも問われてきていることである。

問1 仮説検証を問題のリードにしている点は、共通テストの新しい試みだが、導入だけで終わっている点が残念。断面図では陸上だけを描いたものはしばしば見られるが、海底地形とセットで総合的に考察させる点は評価できる。良問である。

問2 2枚の地図の月を判断し、会話文の正誤を判断する問題。気圧帯やモンスーン、赤道の位置などを理解し、総合的に判断しなければならない。良問と判断する。

問3 「地理B」が地理歴史科の中の1科目であることを踏まえ、地理学習においては歴史的背景を踏まえて考察させることが求められている。本問は、歴史と関連させグラフの読み取りや地理的思考力を加えた良問に仕上がっている。

問4 世界の4地域において、2カ所ずつを比較する問題。地域間の比較を強調した問題である。地域間の比較は地理的見方の本質であるが、受験者にとっては決め手を欠いたのではないか。

問5 「炭素量が植物に占める割合と土壌に占める割合」の目新しい資料を用いた出題。各短文の内容理解には、背景知識と思考力を必要としている。難しいが良問としたい。

問6 カナダの火災を素材に、空欄に当てはまる語句や文を選ぶ問題。常識的な知識で当てはめられる内容もある。このような出題形式の場合、言語力なのか、常識なのか、地理的知識や考え方なのか、どのような力を問おうとしているのか検討する必要があるように感じる。

第2問 産業と貿易に関する問題である。各設問にさまざまな分野の図が示され、その図を読み解くにあたり、幅広い知識を問うている。いずれの問題も難易度は標準的である。

問1 都道府県の人口と産業別就業者数の関係から各産業の都道府県人口と産業別就業者数の関係を見る問題である。人口規模に比例する産業、人口の多い都道府県で就業者数が減少する産業など、それぞれの産業の特徴を理解して解答する。問題は標準的であるが、両対数グラフを用いての出題であり、受験者にとっては初見のグラフであろう。読み取りに苦労した受験者も多かったかも知れない。良問である。

問2 農業立地論に基づく仮想モデルを理解し、作物を判定する問題。第1回の工業立地論同

様、理論的な内容の理解を問う地理Bの特徴といえる問題が出題された。基礎・基本の習得度を測ろうとする作問者の意図が読み取れる。難易度は平易である。

問3 東京からの距離に応じた作物の収益性と各県の特徴から、作物と農地の用途を判定する問題。単純な組み合わせを選ばせる形式ではなく、2種類のデータをもとに判定する必要があるため、難易度はやや難である。片対数グラフを使った問題であるが、10の何乗というスケールでものを見る視点は、大学における学びを考えると重要である。良問といえる。

問4 市場からの距離が立地に影響を及ぼしている例として正しいものを選ぶ問題。いずれの設問も、世界の都市分布など、基本的な知識を背景として考えさせる内容であり、問題の難易度は平易である。問題文に「最も」とあるので④を選ぶであろうが、②も市場の近さの影響も否定できないのではないか。大きく見ればフィレンツェはヨーロッパの中心地域に属しており巨大市場地域にあるとみなすことができるからである。問3と比べると、やや単純な設問となっており、もう少し出題の方法等に工夫があればよかったかもしれない。もっとも全体的なバランスからみればこのような単純な出題も必要であろう。

問5 1人当たりGDPと輸出依存度を4分類し、国名を当てはめる問題。単純に国名を当てはめるだけでなく、その国の特徴も合わせて選択する、新傾向の問題といえる。難易度は標準的である。

問6 訪日観光客の動向に関する問題。時事的な内容であり、日頃からニュースなどに触れてきた受験者にとっては、解きやすかったのではないかと。今後も、こうした出題を増やすことで、受験者が身近な事柄と地理的事象とを結びつけて考えるきっかけ作りをして欲しい。

第3問 人口と村落・都市に関する問題。図、写真、グラフを活用して幅広く内容を問うている。大問全体としてのレベルは標準だが、知識・技能を問う問題が多く、思考力・判断力をより深く問う問題があっても良いのではと思われる。

問1 高齢化社会・高齢社会・超高齢社会に達した年から、国名を推定する問題。中国は容易に判断できるが、残り3つを推定するのは難しい。カナダが19世紀に開拓されたこと、日本の少子高齢化の進行が速いことなどを踏まえて解答する。やや難しいレベルの問題。

問2 女性の労働力率曲線から国名を推定する問題。日本と同様にM字カーブになっているのが韓国、30代でも女性の労働率が高くその後上昇するアを福祉政策の厚い北欧のフィンランドと同定できる。標準的なレベルの問題。

問3 円村に関する常識的な内容の問題。大問全体のバランスを考慮すると、1問程度このような問いがあるのも適度。基本的なレベルの問題。

問4 都市人口率の推移を問う問題。サ・シ・スの文章から国名を推定できなくても、盛んな産業から判断できる問題。「ルックイースト政策」や「長期的な植民地支配を受けることはなかった」など、国名を推定できる語句もあるため、世界地図から国の場所を選ぶ要素があってもよかったかもしれない。標準的なレベルの問題。

問5 大阪府における鉄道と自動車の移動と昼夜間人口比率に関する問題。夕の大阪市から郊外に鉄道網が伸びているのを把握できれば、移動経路を把握するのは容易である。また、夕の大阪市が中心性のある都市、チの和泉市が郊外と前半の図の読み取りで把握できていれば、昼夜間人口比率も容易に判断できる。標準的なレベルの問題。

問6 静岡市における施設立地の分布に関する問題。一定間隔でみられる記号、駅前周辺に多い記号、駅前だけでなく郊外の道路沿いにも多い記号と読み取っていく、空間的思考を問う良問。標準的なレベルの問題。

第4問 西アジアに関する大問。地図、グラフ、写真、統計資料などを用い、多面的に地理的事

象を読み取らせようとする姿勢は評価できる。

問1 F地点は砂漠で内陸に位置していることから、最暖月平均気温が最も高い②であると判断できるが、難しい問題である。

問2 写真を用いているが、写真に付された説明のみで解答可能。写真から読み取れることを問うといった工夫が必要。基礎的なレベルの問題。

問3 石油資源に恵まれないトルコとアフガニスタンに着目し、1人当たりGNIの高いトルコをcと考える。aとbは人口規模を考えれば容易に判別できる。この4分類はこの地域の特性を考察するうえで重要な視点であるので、これに紐付けた出題がなされるとよりよかったと思われる。

問4 人口ピラミッドの男女比の差が大きいことから、②、④の要因は誤りであることがわかる。①は一時的な人口移動なので人口構成に反映されることはない。資料をよく見れば常識的に解答可能。

問5 いずれもイスラム圏に属する国であることから、豚肉とナツメヤシの判別は容易。トルコとモロッコの判別に関しては、ナツメヤシの栽培適地や両国の食文化に関する知識がポイントになる。両国の気候の違いに加え、農作物や食文化の理解をふまえた、地理的思考力を試す良問といえる。

問6 ヨーロッパ各国に居住するモロッコ人の数は、旧植民地との関係から判断できる。また、トルコは近年隣国のシリア難民を受け入れているため、タをトルコと判別できれば解答できる。歴史的な経緯に関する知識に加え、日ごろのニュースに接していることが求められる。大学入試としてはふさわしい出題といえる。

第5問 「地理A」と共通問題、詳細は「地理A」を参照。

### 3 ま と め

第1回の共通テストは、地理Bに関しては、基本的に従来の地理Bを踏襲したものであり、大きな変化はなかった。それは、従来から地理の試験問題が、思考力を重視する新しい学力観を先取りしていたからだともいえる。もちろん、第1問のように探究的学習を意識した出題も見られるなど工夫がみられた。第2問は理論的な内容を扱い、かつ対数グラフを使って出題するなど、高校で習得すべき内容を示しており、好ましいものである。第3問では、GISを用いて作図した地図を読み取らせるなど空間的思考力を強く意識している。第4問は地誌の出題である。地誌は大問が1つ減少したが、A、B分けることで、比較地誌の出題を維持している。また、地誌も単なる暗記物にならないような工夫がなされている。第5問は例年通り、「地理A」と共通問題であった。地域調査が地理学習のかなめであると同時に、市民性の育成の上でも重要であることが示されている。今後も出題を続けていただきたい内容である。今回最初の共通テストであったが、全体的に出題内容、問題数や設問形式は概ね適切であったと思われる。しかしながら、以下の点については改善を望みたい。

1) 正積図法ではない分布図（土砂災害発生地点を示す点描図）を用いた設問がみられた。

2) 写真を用いながらも、写真に付された説明のみで解答可能な設問がみられた。

1) については、面積により地点の粗密イメージが異なってくるため、分布図については正積図法で示していただきたい。2) については、写真から読み取れる事象を問うような工夫をお願いしたい。また、以前から要望しているところであるが、写真資料のカラー化についても是非検討していただきたい。



## ② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

TEL 03-3946-9668

## 地理A・地理B

## 1 前 文

全国地理教育研究会は、主に全国の高等学校で実際に地理を担当している教師を中心として構成された研究組織で、会員は年1回の研究大会と年2回の会報の発行を軸に研鑽を重ねている。それだけに、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）に代わり実施された大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の問題には強い関心を持っており、毎年のセンター試験実施後に引き続き、本年も共通テストについての検討会を設け、さまざまな角度から意見交換を行った。

今年度は、新テストへ移行して初めての年度であり、共通テスト(2)は共通テスト(1)に次ぐ出題であったが、「地理A」、「地理B」とも大問数や構成は、共通テスト(1)とほぼ変わらなかった。また「地理B」では、共通テスト(1)同様に、センター試験と比べて大問数が減少し比較地誌の大問は設けられなかった。また、学習の過程を意識した場面を設定した大問の出題は、共通テスト(2)でもみられたが、特に「地理A」では、第2問、第3問、第5問と多用され、第1問でも資料を提示する形での小問が複数みられた。小問では、知識理解をもとに思考力や判断力を用いて解答することを求められるものが多く出題されたこと、組合せ選択の形式のものが多かったことなどが、共通テスト(1)同様に目立った。こうした点に注目しながら、以下に本会の意見・評価を述べていきたい。

## 2 試験問題の程度・設問数・形式等

## (1) 試験問題の程度について

今年度の共通テスト(1)の平均点は、「地理A」で59.98点、「地理B」で60.06点であったが、共通テスト(2)は、「地理A」で61.75点、「地理B」で62.72点であった。それぞれ平均点が共通テスト(2)の方がやや高かったが、差は小さく、両日程間の平均点が大きく異なる教科・科目が多かったことと比べれば、大いに評価できる。作問者の先生方に敬意を表したい。共通テスト(1)同様、全体として、高等学校までの学習内容に概ね沿った小問が圧倒的に多く、学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんどみられなかった。

地理Aでは、資料が豊富に示され、その中でも複数の資料を照らし合わせるなどして解答に時間を要する小問が多く、組合せ選択による小問が、共通テスト(1)同様に多かった。しかし、これも共通テスト(1)同様に、資料に丁寧に向き合えば、問われている内容そのものは、標準的なものが多かった。しかし中には、低くはない知識レベルを必要とする小問も見受けられた。「地理A」では、知識の有無に特化せず、資料の読み取りや活用、思考・判断をともなう問の数を増やすような作問を引き続き求めたい。そのためには、いたずらに資料の提示数を増やすのではなく、資料数を吟味し、場合によっては解答数を減少させるなどして、解答時間にゆとりを持たせた上で、じっくりと問題に向き合うような作問をお願いしたい。

「地理B」については、「地理A」と同様に、文章量や使用する資料は多かったものの、共通テスト(1)よりもさらに精選された印象である。しかし、高得点者の割合が、地歴3科目で比較すると少ないであろうと考えられる点に変わりはなく、課題として残されたままである。「地理B」では、一定の知識レベルが要求される中で、提示された初見の図表や地図、設問文などを通して思

考・判断を要する小問が多い。そのため、「世界史B」や「日本史B」のように短時間で解答にたどり着けるような小問が極めて少なく、解答に際して多くの時間をかけて考えることになる。その上で、複数の資料について検討し解答する組合せ選択の小問が多い。こうしたことが、高得点者の少ない要因であることは、共通テスト(2)においても変わりがない。来年度以降は、「地理B」を学習した生徒が、しっかり学習をすれば満点に近い得点がとれるような作問を切に願うものである。

## (2) 設問数や大問の構成、形式について

大問数は「地理A」が5問、「地理B」も5問で共通テスト(1)と変わりなかった。また、小問数は「地理A」で30問、「地理B」でも30問で、一つの小問を二つに分割したものは共通テスト(2)ではみられなかった。大問ごとの小問は、「地理A・B」とともにすべて6問ずつで、この点も変わりなかった。小問数が減少したものの、「地理A」・「地理B」とともに地図、グラフ、表、写真などの資料は豊富で、解答に時間を要し見直す余裕はほとんどなかった。小問数のさらなる削減を要望したいが、少なくとも今年度の小問数を維持していただきたい。

大問の構成についても、共通テスト(1)と変わりなかった。また、「地理B」では試行調査、共通テスト(1)と同じく「比較地誌」の大問は出題されなかった。しかし共通テスト(2)では、地誌の大問をA・Bに分割した中で、比較地誌的な出題がみられた。地誌に関する大問の削減を見据え出題教科・科目の問題作成の方針には、「系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題の検討」との内容が示されていたが、そうした問は共通テスト(2)においても、ほとんどみられなかった。「地域調査」の大問が「地理A・B」共通である点にも、変化はなかった。

問題の形式については、1.「組合せ選択」の小問が多くみられること、2.「地理A」・「地理B」とともに地図や図表・グラフが多用されていることが指摘されたが、共通テスト(1)同様、「組合せ選択」の小問数の多さが際立った。また、3.文や文中の下線部の正誤を問う形式の小問が共通テスト(1)と比較して非常に多かったこと、なども指摘された。なお、「地理A」を含めて、GISが特に意識的に使われているとの指摘はなかった。これらの点について以下に詳しく述べる。

1.について、解答に時間を要する原因の一つである6択以上の「組合せ選択」の形式は、共通テスト(2)においても多く、「地理A」で9問、「地理B」で11問出題された。この他に、文中の空欄にそれぞれ適語を入れるなど2×2の4択となっている「組合せ選択」の小問が、「地理A」で7問、「地理B」で6問みられ、全体として「組合せ選択」の小問が非常に多かった。「組合せ選択」の間は、定番の形式として受け入れざるをえないが、作問上、組合せではない4択にしにくいなど致し方ない場合を除き、安易に多用することがないよう、共通テスト(1)に引き続き強く要望する。2.については、「地理A」(地図・図17, うち地形図1, 地理院地図2, 表6, 写真・絵・イラスト5, グラフ3), 「地理B」(地図・図18, うち地理院地図2, 表4, 写真・絵・イラスト5, グラフ11)で、共通テスト(1)同様、地図や表などを見て思考・判断する小問が多数みられた。地理である以上、適切に地図や図表を読み取る技能は重要であり、基本的には歓迎する。ただし、高等学校までの学習を終えた生徒が理解に時間を要するような図表が多数出題されることがないように配慮をお願いすると同時に、地図や図表がこれ以上増えることのないようお願いしたい。なお地図については、「地理B」では地形図が用いられず、地理院地図のみからの出題であった。3.について、共通テスト(1)では、組合せ選択の小問の大幅な増加を受けて、4つの文の正誤を判定する小問が少数となり、長文の説明文や読み取りの文について文中の下線部の正誤判定をする小問も、ほとんどみられなかった。しかし共通テスト(2)では一転して増加し、共通テスト(1)との違いが大きかった。なお、GISを用いて作成された図は、今後出題数が増加するだろうとの意見は多くあったが、共通テスト(2)では非常に少なかった。

### 3 「地理A」について

豊富な資料が提示された第1問や、生徒が作成したとする資料を提示するなどして学習の過程を取り入れた第2問、第3問、第5問など、共通テスト(1)と同じく、共通テスト初年に相応しい大問の作成がみられ、評価は高い。その一方で、提示された豊富な資料に加え、組合せ選択の小問がこれまでのセンター試験に比べて大幅に増加し、共通テスト(2)においても、30小問中16問を数えたことで、解答に要する時間が増加したと考えられる点は、課題である。一方、2単位を標準とする地理Aでは、扱える学習の量はかなり限られたものとなり、細かな知識レベルを前提とした設問は成り立ちにくい。しかし共通テスト初年の「地理A」の各小問は両日程とも、概ね適切なレベルに作問されており、この点についても評価は高い。また、平均点が共通テスト(1)とほぼ変わらなかった点についても、評価は高く、作問にあたられた先生方のご苦勞に感謝したい。

**第1問 「日本の自然環境と防災」** 大問のタイトルが、共通テスト(1)の「現代社会における地図と地理情報の活用」から「日本の自然環境と防災」に変わり、これまでのセンター試験での「地理A」第1問のタイトルである「地理の基礎的事項および日本の自然環境と防災」に近いものとなった。「地図と地理情報の活用」とのタイトルではないが、問1～問5までには地形図をはじめとしたさまざまな図や表が提示され、まとめの位置づけとして設けられた問6も含めて、図表を活用する場面設定がなされた大問である。共通テスト(1)では、新学習指導要領の「地理総合」でより重視される「地図と地理情報」が前面に出され、共通テスト(2)では同じく重視される「防災」が前面に出されたものであったが、両日程とも両者が不可分に結びついた形での出題であった。なお、共通テスト(1)の第1問で意識されたGISに関連した小問はみられなかった。また共通テスト(1)と同じく、これまでのようなメルカル図法等の世界図を用いて問う小問はみられなかった。出題形式としては、問1から問5までが、図や表を参照しながら提示された文や文の下線部の正誤を判断する間で、まとめとして設けられた問6も文の正誤を判断するものであった。共通テスト(1)では文や文の下線部の正誤判定が非常に少なかったこともあり、問い方の変化が大きかった。

問1 地形図の読み取りに関する文の下線部の正誤判定の小問。勾配があれば地図上の距離よりも地表面上の距離が長くなるので誤りとなる下線部は判断が難しく、やや難の問。

問2 日本各地の2018年の暖候期の降水量と平年比について示された図の読み取りに関する文の正誤の組合せ選択の小問。ていねいに図を比較して読み取れば、やや易の問。

問3 日本のおもな気象災害が示された資料について述べた文の正誤を判定する小問。資料を通じて考察できることとできないことの判断を求める小問で、標準の難易度。

問4 提示された連続堤防と不連続堤防(霞堤)に関して堤防の機能や周辺への影響について述べた文の正誤を判断する小問。判断に迷う選択肢が二つあり、やや難。

問5 資料に示された地区における大雨による災害時の避難のあり方について述べた文の正誤を判断する小問。資料をていねいに読み取れば、難易度は標準。

問6 問1～問5のまとめとして生徒が話し合った会話文中の下線部の正誤を判断する小問。ハザードマップで危険性が示されていなくとも安全とは限らないという、ハザードマップへの過信を戒める内容となっている。難易度としてはやや易。

**第2問 「世界の生活文化の多様性」** 共通テスト(1)においてもセンター試験同様に出题された生活・文化の大問。多様性をテーマに出题され、生徒の学習場面を想定し資料を提示しながら設問が進む形式であった。示された図、表、写真などは、いずれも定番のもので読み取りに時間を要することもなく、問の難易度も高くなかった。

- 問1 イモ類、小麦、トウモロコシの食料としての世界的な分布を問う組合せ選択の小問で、易。
- 問2 図中の3地点と、食べ物の調理法や食べ方に関するカードとの組合せ選択の小問。提示された表やカードが有効に利用されていない印象。やや易。
- 問3 米の年間消費量と輸出量に関して示された表に関する文の下線部の正誤判定の間で、標準の難易度。
- 問4 南アメリカの高地における市場の写真に関する会話文中の空欄の適語についての組合せ選択の小問で、やや易。
- 問5 世界各地の生活習慣とその背景に関して述べた文の下線部の正誤判定の小問で、易。異文化理解に関する問であるが、スコールの特徴で誤りと判定する内容には疑問の声も上がった。
- 問6 写真で示された多文化共生への取り組みについて述べた文の正誤判定の小問。誤りの事例は容易に判断できる易問であるが、多文化共生への取り組みという取り上げ方は良い。

**第3問 「東ヨーロッパ」** 東ヨーロッパに関する大問で、第2問に続き、生徒の学習場面を想定し資料を提示しながら設問が進む形式。東ヨーロッパは、ヨーロッパの中では学習が手薄な地域であるが、西ヨーロッパとの関りの中で問われている小問も多く、共通テスト(1)の南アジアよりも、学習が手薄な地域に対する配慮がなされている。各小問の内容も工夫された良問が多く、完成度の高い大問として評価したい。

- 問1 センター試験でも定番であった3地点の雨温図の組合せ選択の小問。Aの地点がアルプス山中であることを判断できれば、難易度は低い。
- 問2 地域の宗教分布を問う組合せ選択の小問で、難易度は標準。宗教分布を問うたものとしては、問い方や図の示し方が、これまでのセンター試験と比べて異なり工夫されている。
- 問3 大型観光船の出発地としての条件を満たす都市を選択させる小問。小問で示された図と文を、大問の冒頭に示された図と照らし合わせながら判断する形式の間で、工夫された良問。難易度は標準。
- 問4 オーストリアとルーマニア、ブルガリアの経済格差についてEUの拠出金と配分金をもとに考察する組合せ選択の小問。東西ヨーロッパの経済格差を問う工夫された問。難易度は標準。
- 問5 ルーマニアの伝統料理と歴史的背景を問う組合せ選択の小問。ルーマニアを支配した帝国がロシアかトルコか分からずとも、提示された文中に豚肉に関する記述がありトルコの支配を受けたと判断できるなど、ルーマニアの料理を題材としながら世界の食文化の基本的知識を問うており、良問と評価したい。難易度はやや高い。
- 問6 酸性雨の発生と被害について示された図と、発生と被害の相関について示した文との組合せ選択の小問。二つの異なる事象について問うて組み合わせるものではなく、偏西風の影響により酸性雨の原因物質の発生地域と被害地域が異なるという相互に関連した事象についての理解を組合せで問うており、組合せ選択の小問としては良問である。難易度は標準。

**第4問 「地球的課題」** 共通テスト(1)の「世界の結びつきと地球的課題」が共通テスト(2)では「地球的課題」となり、世界の結びつきが意識された小問は第4問の中にはみられなかった。組合せ選択の小問が4問で多く、共通テスト(2)で多くを占めた文の正誤判定は1問と少ない。

- 問1 インドでは石炭火力、カナダでは水力発電が発電に占める割合が高いことをもとに、化石燃料による発電割合の推移を示した表と3か国を組み合わせる小問。標準の難易度。
- 問2 発電量上位とその割合を示した図と、発電における課題を示した文から地熱発電を選ぶ組合せ選択の小問で、標準の難易度。

- 問3 地域による食料問題の問題点の違いや、それを踏まえての問題解決への取り組みについての文の正誤判定の小問で、やや易。提示資料がなく選択肢として示された文のみの小問としては、「現代社会」にならず「地理」の問として成り立っている。
- 問4 3か国の合計特殊出生率と乳児死亡率の推移に関する小問。グラフに示された3か国の組合せだけではなく、示された統計年次の新旧についても問う組合せ選択の小問で、フランスを取り上げたことで問の内容が深まっている。難易度は標準。
- 問5 「地理A」参考問題例と共通テスト(1)でも出題されたフローチャート中の空欄への適語を選ぶ小問。共通テスト(2)ではスラムが発生・拡大するメカニズムについてのフローチャートが示された。難易度はやや易。
- 問6 スプロール現象とインナーシティの発生と再開発について問う組合せ選択の小問。提示された図は、大都市の空間的拡大について分かりやすく示されており良問との意見があった一方、モデルにあてはまらない都市も多いのではないかとの指摘もあった。難易度は標準。

**第5問 「福岡市の地域調査」** 地形図や写真を含め図表など資料を多用した小問が並び、それらの資料を読み取りながら思考・判断していく構成は、共通テスト(1)と同様のものではあった。また、対話文をはじめ長めの文章が少なく、例年よりも時間がかからず解答できたと考えられる点も、共通テスト(1)と同じであった。またこれも共通テスト(1)と同様、図として示された資料には、地形図ではなく地理院地図が用いられた。そのため、地理Bでは、本大問を含め地形図を用いた出題はみられなかった。なお、「地理A」受験者にとって特に不利になる小問はみられなかった。

- 問1 福岡市とその周辺の上空写真と撮影地点との組合せ選択の小問で、標準の難易度。
- 問2 GISを用いて作成された2枚の主題図を読み取って述べた文の正誤判定の小問。資料の読み取りで、やや易。
- 問3 広域中心都市としての福岡市の産業の特色に関する組合せ選択の小問。支店経済の特徴を示した表とそれに関する文が分かりやすく示されている。難易度は標準。
- 問4 福岡市内の3地点についての説明文が添えられた景観写真と、人口増加率と老年人口率が示された表との組合せ選択の小問。都心からの距離による景観や人口に関する相違を問う工夫された問で良問としたい。難易度としては標準。
- 問5 地理院地図を手にして行った現地での観察についての会話文中の下線の正誤を判断する小問で、標準の難易度。
- 問6 福岡市からの都道府県別転出入について示された統計地図を読み取って述べた文の正誤判定の小問。統計地図を読み取っての判断が含まれるが、難易度はやや易。

#### 4 「地理B」について（「地理A」との共通問題を除く）

大問構成と内容については、第1問がA・Bに分けられたことや、第3問が人口、都市である点なども含めて共通テスト(1)と同じであった。前年までのセンター試験と比べて大問数、小問数とも減少したが、図や写真、グラフ、表などの資料が豊富で、組合せ選択の小問も多く時間を要したと思われる。しかし、共通テスト(1)の第1問のような作り込みすぎた大問はなく、これまでのセンター試験に近い印象で、共通テスト(1)よりも解答しやすいものだったと考えられる。そのためもあり、共通テスト(1)よりも平均点は、やや高かった。来年度以降の作問に当たっても、共通テスト(2)を参考にお願いしたい。

**第1問 「世界の自然環境と災害」** 大問タイトルに共通テスト(1)では添えられていなかった「災

害」が加わり、半数の3問が直接災害について問うものであった。授業での生徒の学習場面を意識し様々な資料が提示された大問で、A・Bに分かれ、土砂災害に関する3小問と森林における災害についての3小問が出題された。題意の読み込みや資料の読み取りに時間がかかる小問が多かった共通テスト(1)と比較すると、これまでのセンター試験に近い小問が多く、受験者には解きやすいものであったと考えられる。

問1 2地点の地形断面図と、断面図に特徴的な地形が形成された要因についての文との組合せ選択の小問で、難易度は標準。断面図の選択だけではなく、地形形成要因にまで踏み込んだ出題による組合せ選択となっており、こうした形の組合せ選択の小問が共通テストでは増加している。

問2 1月と7月の土砂災害発生日点に関して示された文中の下線の正誤を判断する小問。誤りはモンスーンの風向きであり、平易。

問3 黄河の土砂流出量の経年変化を示した図に関する文の正誤を判断する小問。文がカードとして示されている点は新しい。しかし、カードで示した効果はなく、誤りもカードを読めば明らかで易問。

問4 世界の森林分布に関する小問。共通テスト(2)「地理A」第3問の問3と同じく、文中に示された条件に合う地点を選択するもので、やや難。今後こうした問い方で思考力や判断力を図ることが増加すると考えられる。世界の気候と植生ならびに大地形を大観出来ているかどうかを問う工夫された小問となっている。

問5 森林の炭素量を植物と土壌の占める割合に分けて示した資料に関する文中の下線部の正誤を判断する小問。森林の相違による植物と土壌における炭素量の多少の要因を問うもので、やや難。②の下線部「近年の人為的な開発の影響」における「近年の」を誤りの文とする点については、疑問の声が多かった。

問6 カナダの森林火災に関する会話中の文中の空欄についての組合せ選択の小問。図や写真、会話文を用い森林火災について多面的に考察する場面が設定され、問題文も2ページに渡る力作。難易度としては、容易に判断できる易問。

**第2問 「産業と貿易」** 共通テスト(1)の「産業」とは異なり「産業と貿易」となったが、貿易についての出題は1小問だけであった。共通テスト(1)の工業の立地モデルに続いて、共通テスト(2)では農業に関する仮想モデルについての小問がみられた。共通テスト(1)においても立地は2小問出題されたが、共通テスト(2)では6小問中の4小問が設問文中に立地が含まれたものとなった。また、共通テスト(2)ではさらに、立地の中でも市場との距離について3小問に渡って問われた。産業において立地を問うことは、思考力や判断力に結び付けやすいとは言うものの、両日程を通じて立地に偏りすぎたと指摘せざるを得ない。様々な内容や形式で思考力や判断力、表現力を問う作問を願いたい。

問1 3つの産業と、都道府県別に示された人口とそれぞれの産業の就業者数を示した散布図との組合せ選択の小問。散布図がそれぞれ特徴的で、思考・判断に関する良問となっている。難易度はやや高い。

問2 農業立地に関して与えられた条件と説明文から仮想のモデルにおける作物の分布を判断するもので、工夫された問い方の小問である。難易度は、やや高い。

問3 問2に続き市場からの距離と農地面積当たりの収益に関して扱われた小問で、具体的に3つの作物についての判別を求めている。また本問では、14都府県の農地面積に占める田、畑、樹園地の構成比に関する図についても判別を求めている。そのため、選択肢が9つある組合せ選択の小問となっているが、それぞれ一つの小問としても十分に成り立つ内容であ

る。東京からの距離と農地面積当たり収益についての野菜と果樹の判別が難しく、やや難である。良問との声が多かった。

問4 世界各地の産業の立地の中から、市場からの距離の近さに強く影響しているものを選択する小問。本問も市場との距離に関して問うたものとなっている。難易度は標準。

問5 輸出依存度の大小と1人当たりGDPの多少で各国を分類した表中の空欄に当てはまる国を、各国からの日本の主要輸入品目で選ぶ組合せ選択の小問。各国の経済的水準や産業の特色で表中に当てはまる国と主要な輸出品を判断する思考力・判断力を問う小問となっている。難易度はやや高い。

問6 アメリカ合衆国、韓国、中国からの訪日観光客数と、1人当たり旅行消費額と買い物代や宿泊費などの内訳が示されたグラフについて、アメリカ合衆国と買い物代を選ぶ組合せ選択の小問。難易度は標準。

**第3問 「人口と村落・都市」** 共通テスト(1)と同じく都市と人口分野からの大問。人口について2小問、村落・都市について4小問が問われ、共通テスト(1)と同じく「生活文化」の小問はみられなかった。はじめの4小問は、知識・理解を求めるものであったが、終わりの2小問は、思考力・判断力を問う良問であった。

問1 4か国について老年人口率の特定の比率への到達を示したグラフからカナダを選択する小問。解答を求められたカナダ以外の3か国の判別が平易で、やや易。

問2 女性の労働力率を年齢階級別に示したグラフについての3か国の組合せ選択の小問。韓国の判別は平易だが、アメリカ合衆国とフィンランドの判別が、やや難。

問3 円村に関する分布地域と形態の利点についての組合せ選択の小問。円村についての学習が行われていれば難易度は高くないが、円村まで学習しているとは限らず、正解率は低いと考えられる。

問4 3か国の都市人口率の推移と、各国の社会経済的状況を示した文との組合せ選択の小問。各国についての文は具体的に書かれているが、3か国が明示されていない点が新しい形式となっている。難易度は標準。

問5 大阪府における自動車と鉄道について出勤目的における地区間の移動者数を示した図と、図中に示された2地区の昼夜間人口指数の大小についての組合せ選択の小問。大阪府について示された図であることは明らかであるが、問題文では「ある大都市」として明示を避けている。難易度は標準。初見の図を見て都市構造について思考・判断させる工夫された問である。

問6 県庁所在地の中心部における3つの施設の立地を組み合わせる小問で、図中から各施設の立地の特色を思考・判断する良問。センター試験で平成14年度の本試験で出題されたものと類似しており、過去問からの出題もありうるとしたセンター試験の方針が引き継がれていると感じられる。難易度は標準。

**第4問 「西アジア」** 2度の試行調査、共通テスト(1)ともに先進地域から出題されたが、共通テスト(2)では発展途上地域から出題された。センター試験では過去、西アジアや西アジアが含まれた地中海地域が比較的近年に出題されており、学習が比較的手薄と考えられる地域としては、出題頻度が高い印象である。易問もみられるが、西アジアの地域についてのしっかりとした知識理解が必要な小問が多く、難易度はやや高い。またA・Bに分かれてのBパートでは、西アジアのトルコと北アフリカのモロッコを比較する地誌が出題された。

問1 4地点の1月と7月の月平均気温と月降水量を示したグラフの中から該当する地点を選択する小問。判別が難しい2地点を求めており、やや難。

- 問2 地域による水資源の確保の違いに関する組合せ選択の小問で、標準の難易度。
- 問3 西アジアの各国と、1人当たりGNIの大小と1日あたり原油生産量の多少で分けた4つのグループとの組合せ選択の小問。西アジアの経済的状況を大観させる良問との声があったが、サウジアラビア、トルコ、イランについてのそれぞれの理解が必要で、やや難。2つの指標に関して4つのグループに分け、それぞれに当てはまる国名を判断していく形式は、第2問の問5と同じものである。
- 問4 アラブ首長国のドバイの人口増加要因について適当なものを選択する小問で、易問。
- 問5 トルコとモロッコにおけるナツメヤシと豚肉の1人当たり年間供給量について示した表中の国名と作物名の組合せ選択の小問。トルコよりもモロッコでナツメヤシ供給量が多いことを判断する点は難しく、難易度はやや高い。
- 問6 トルコとモロッコからのヨーロッパ各国への移動数と、両国の受け入れ難民数の推移についてモロッコを選ぶ組合せ選択の小問。トルコでシリアなどからの難民が増加していることが理解できていないと、難易度は高い。

第5問 「福岡市の地域調査」 第5問の評価は「地理A」での記述の通り。

## 5 要 約

共通テスト(2)の「地理A」・「地理B」を小問単位で検証した結果、共通テスト(1)同様に、これまでのセンター試験と同じく、高等学校までの学習内容に沿った小問が大多数で、学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんどみられなかった。高く評価したい。また、思考・判断を重視した小問も多く、この点についても評価は高い。ただし、出題方針に示された地理的な諸課題の解決に向けて構想する力を問うものは、「地理A」ではみられたが、「地理B」ではみられなかった。なお、これまでも、「地理A」で出題された東ヨーロッパや「地理B」で出題された西アジアの地誌のように、あまり学習機会のない地域の出題にあたっては、知識に偏らないよう注意をお願いしてきたが、共通テスト(2)「地理A」はそうした点への配慮が行き届いた大問であり、この点についての評価は高い。共通テスト(1)の要約においても触れた内容ではあるが、地理は、これまでのセンター試験においても、今年度の共通テストの両日程においても、「地理A」・「地理B」ともに、知識をもとに思考・判断する力について十分に検証できる問題作りが行われてきており、そうした点についての評価は非常に高い。しかし一方地理は、地理歴史科の選択科目の一つであり、「地理B」が並立して置かれている「日本史B」や「世界史B」の度数分布と大きく異なっていることは、望ましくない。そうした点を考慮するならば、日本史や世界史と同様に、一問一答の知識をストレートに問うような小問を増やし、思考・判断を伴う小問の解答に費やす時間を増やしてもよいのではないだろうか。来年度以降、今年度の評価を参考に、しっかり学習した生徒が高得点をとれるような作問をお願いしたい。

本会ではこれまで、1.基礎・基本としての必須な知識を整理し、それを前提に作問し、それ以上のレベルの知識には必ず情報を与えること、2.授業で扱うことのない専門性の高い内容や未だ研究段階で諸説あるような内容を安易に出題しないこと、3.専門性の高い作問者の常識と受験者のそれとの落差に留意すること、4.解答にかかる時間に十分に配慮すること、を重点としてお願いしてきた。本会は、学習の成果を踏まえた適切な設問であれば、たとえ難問でも評価し、歓迎する。

今年度は共通テスト初年度であり、共通テスト(1)、(2)ともに、これまで以上に作問者の先生方のご苦勞を感じ取ることができた。次年度以降も、われわれの手本となる問題の作成が行われることを期待して講評を終わる。



### 第3 問題作成部会の見解

#### 地 理 A

##### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。地理的な見方や考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり，地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求める。問題の作成に当たっては，思考の過程に重きを置きながら，地域を様々なスケールから捉える問題や，地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり，資料を基に検証したりする問題，系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題などを含めて検討する。

##### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 学習指導要領の地理A「自然環境と防災」の内容を主題とする大問である。地理的情報には精度的な限界があること，読み取れない情報もあることを気づかせることをねらった。共通テストで問いたい「事象が生起している場所の特徴をとらえ考察することができる」，「地理的な課題について多面的・多角的に考察し，解決策を合理的に構想することができる」を基礎とし，「地理的な事象を多面的・多角的に考察した過程や結果を，理由や根拠に基づいてまとめることができる」ことを目指した。問1は地形図から防災にかかわる基本的な地形的特徴を読み取るもので，問6とも関連して思考させる。問2は「普段より降水が多い」ことの意味を考えさせる問である。降水量絶対値の大小ではその地域の降水量の多少を議論できないことを気づかせる。問3は資料の注記に注意を向け，読み取れる情報，読み取れない情報を思考させる問である。問4は河川の防災施設の機能を河川の特長，地形などの知識をもとに思考する。問5は模式的なハザードマップから水害時の避難や対策について考えさせる小問であり，ベストな対応が取れない場合のベターな対応を思考させる。問6は問1～5を横断的に振り返り地理的情報の特性，課題，限界を思考させる。

第2問 指導要領の(1)「現代世界の特色と諸課題の地理的考察」のイ「世界の生活・文化の多様性」に対応し，中間Aの問1～3は世界の食文化の多様性を，中間Bの問1～4は人々の行動様式を探究することで，大問全体で生活文化の多様性をテーマに，異文化理解を基に多文化共生につながる学習プロセス型の問題となっている。問1は，米を参考に，イモ類，小麦，トウモロコシが主食となっている地域の分布と自然環境とのかかわりを，問2は，主食の分布を基に食べ方と料理とのかかわりを，問3は，図から主食としての米の分布と表の米の消費量と輸出量の読み取りを基に，モンスーンアジアの米の自給率と米の人口支持力についての仮説を思考する問題である。問4は，衣服を事例とした行動様式と自然環境との関係，問5は，世界各地の日本と異なる生活習慣と自然・社会環境との関係を思考し，問6で写真を基に宗教とかかわる多文化共生策を判断させる問題である。問1～4の食事や衣服を事例とした異文化理解，問5の生活習慣の背景を捉えることで異文化尊重，問6の宗教にかかわる配慮から多文化共生の大切さを意識させることを意図している。全体の平均点は他の大問に比べて高かったが，おおむね標準的であった。

第3問 指導要領の(1)「現代社会の特色と諸課題の地理的考察」のイ「世界の生活・文化の多様性」に対応し，東ヨーロッパを中心とした「ドナウ川の船旅」の経路を導線として，自然環境，

人間活動及び社会状況を取り上げ、主題図や写真などの資料を基に、多面的・多角的な視点から思考することで、東ヨーロッパを中心とした地域的特色を明らかにしていく問題である。問1は、ヨーロッパ各都市の位置や地形などから気候区分を、問2は、ヨーロッパの3つの国際河川沿いの宗教分布を、問3は、大型観光船の就航条件の下で、河川の平均流量と流域の観光資源である世界遺産の分布を関連させて出発地を思考する問題である。問4は、リード文とEUの拠出金・配分金に関する図を基にドナウ川の中流と下流の国でどのような経済格差があるのかを、問5は、ドナウ川下流のルーマニアの家庭料理と農業と宗教と歴史的な近隣国とのつながりを、問6は、窒素酸化物の排出と森林被害に関する図を読み取らせ、1990年代のドナウ川流域周辺の大気汚染問題の要因を卓越風に関する知識との関連性を思考する問題である。

第4問 本問は学習指導要領「地理A」の「(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察」における「ウ 地球的課題の地理的考察」を中心とした大問である。地球的課題として資源・エネルギー、食糧、人口、都市に関する問題を取り上げ、地理的思考の活用や主題図・表・資料・模式図の読み取りから、地球的課題を多面的・多角的に考察する力の重要性を理解させることを意図している。問1は化石燃料利用の時系列変化、問2は自然条件と再生可能エネルギーの利用、問3は食料問題とその解決の取り組み、問4は世界における人口動態、問5は不良住宅地（スラム）発生・拡大のメカニズム、問6は先進国における都市問題の発生と再生の時空間的パターンについて問うている。課題や問題が生じる背景のみでなく課題への対策のあり方について考察する内容を含めることを意図している。

第5問 本問は、学習指導要領「(2) 生活圏の諸課題の地理的考察」の、主として「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」に関わる大問として、福岡市とその周辺地域を対象として取り上げる形で出題した。その際、特に同じく「(2) 生活圏の諸課題の地理的考察」にある「ア 日常生活と結びついた地図」も含みうるように配慮した。各教科書で詳述されている、地域調査の一連の流れ（調査立案・調査前の下調べ⇒調査実施⇒現地での新たな知見）を辿るように小問を配置し、地形図読図や主題図作成など他項目で身につけた「地理的技能」を活用することを意識している。全体を通して、福岡市の地形的な特徴と都市圏の広がり、広域中心都市としての産業構造の特徴、都市圏内における景観と機能の違い、臨海部における都市開発、日本全体のスケールにおける地域のつながりについて、高校生が調べる範囲で一定の時空間的なスケールを踏まえつつ様々な観点から考察することを念頭においている。なお本問は、地理Aと地理Bとの共通問題であるが、特に「地理A」に受験者に不利になったという評価は見られなかった。また、地域的に有利・不利の差は生じなかったと判断される。

### 3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 様々な図表を用いて日本の自然環境と防災がテーマとし、地理総合の内容を意識した問題ともいえ、おおむね標準的な難易度であるといった評価を得た。防災をメインテーマとして多角的な観点から考える出題を心掛けた方向が評価されたと考える。問1は地形図の読み取りについていくつかの観点から問うたが、そのうち地形図上の距離（水平距離）と、地表面上の距離（実際に地上を歩いた時の距離、斜距離）が異なることを問う問題について、難しいといった評価が目立った。水平距離は一般的なものになっていると思われるが、斜距離に当たる概念を誤解なく問う言葉にはさらに工夫が必要かと思われる。問2は、日本各地の暖候期降水量と特定年の暖候期降水量平年比を示し読み取れることを問うたもので、丁寧に読めば難しくないとの評価を得た。問3は気象災害の年表と注記から読み取れることを問うたもので、特に難しいといった指摘はなく、資料を扱う際の留意点に関するスキル問題に落とし込まれていると

の好評価を得た。問4は霞堤の機能と役割を問うもので、やや難しいとの評価を得た。霞堤自体は教科書での扱いに差異があり出題が難しい面があったが、霞堤について学習していなくても解答可能との評価を得ており、連続堤と霞堤の図を示した工夫が評価されたのではないかと考えられる。問5は仮想的なハザードマップからその地域の風水害時の対応を問うたもので、読取結果を避難行動に活かす道筋を明確に示す意欲的な良問といった高い評価を得た。問6はこの各小問の内容を踏まえた会話文で、全体を振り返り様々な事象を総合的に思考することを目指している点、ハザードマップは万能ではないことに気づかせている点などが高く評価された。全体を通し、出題意図はおおむね的確に伝わっていたと考えられる。防災は今後の地理教育の中でも重要な役割を果たすと考えられ、こうした出題を通じて地理教育の発展に寄与していきたいと考えている。

第2問 授業場面を想定して、世界の生活文化の多様性を食文化と異文化理解・多文化共生についてストーリーを立てて探究すること、分布図、統計資料、写真を用い、多面的・多角的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢が評価された。問1は、主な主食の世界的な分布を問う基礎的な問題であるという評価があった。問2は、世界の主食と調理法と食べ方の関係を問うことに工夫がみられるが、一般常識で解けるという指摘があった。問3は、地図と統計から推論する基本的な問題であるが、一部一般常識で解けてしまうという指摘があった。問4は、写真を読み取って衣服の特徴をその背景にある自然環境から考察する基礎的な良問であるという評価があった。問5は、単に用語を問うのではなく、生活習慣の背景として環境条件を問う工夫がされているという評価があった。問6は、多文化共生への取り組みという取り上げ方がよく、写真が宗教の視点からの特徴をとらえた適切なものであるという評価があった。全体として、生活文化の多様性をテーマに異文化理解を深める探究プロセスから多文化共生を取り上げた学習プロセス型の問題となっていることについての評価を受けた。しかし、一般常識で解ける問題があるとの指摘があり、生活文化の学習成果をより反映させるような出題形式を引き続き検討していきたい。

第3問 地理Aの受験者はなじみが薄い東ヨーロッパについて、ドナウ川を旅行する設定や、ヨーロッパ全体の学習成果が反映できるように配慮されており、資料を提示しながら思考していくように工夫されているという評価を受けた。問1は、高山地域の気候区分を取り上げることで思考力が問えるという評価の一方、降水量で戸惑うという疑問が呈された。問2は、ヨーロッパの宗教分布を河川の流域沿いに思考する工夫された問題であると評価を受けた。問3は、大型観光船の出発地として条件を満たす場所を地図とグラフから推察する新傾向の良問という評価を受けた。問4は、EUへの拠出金と配分金の図から東西ヨーロッパの経済格差を思考する工夫された問題という評価を受けた。問5は、なじみのない食べ物について、説明文を基に歴史的関係を含む食文化の背景から思考する良問であると評価を受けたが、写真の使い方の工夫が必要との指摘もあった。問6は、2つの分布図の違いからその要因を考える空間的思考力を問う工夫された問題であると評価を受けた。全体としては各問が工夫され、完成度の高い問題であるという評価であった。今後も地誌的な思考力を問う出題の在り方を考えていきたい。

第4問 様々な資料から読み取ったことと知識等を組み合わせて思考力・判断力等を発揮して解答する問題から構成されているという評価を受けた。問1は、化石燃料による発電割合の推移を示した表と3か国を組合せる小問であり、基本的なレベルの問題という評価を受けた。問2は、地図と文章から、「地熱発電」と「風力発電」の特徴を読み取らせる工夫された問題であり、各発電方式の背景にまで遡り、知識の理解の質を問えているという評価を受けた。問3は、地域による食料問題の問題点の違いや、それを踏まえての問題解決への取り組みについての文章

の正誤問題であり、もう少し複雑な出題形式でも良かったという指摘もあった。問4は、3か国の合計特殊出生率と乳児死亡率の推移について、3か国の組合せだけでなく、統計年次の新旧についても問う組合せ選択の小問であり、フランスを取り上げたことで問いの内容が深まっているという評価を受けた。問5は、スラムの発生・拡大のメカニズムについてまとめた模式図を題材とした空欄補充の問題であり、出題方法にもう少し工夫があっても良かったという指摘があったものの、因果関係について思考力・判断力を働かせて解く小問であるという評価を受けた。問6は、先進国における都市問題について、それぞれの現象についての個別の知識のみではなく、その因果関係についての理解の質までを問えている工夫された良問であるという評価を受けた。また、モデルにあてはまらない都市もいくつかあるのではないかとの指摘もあったものの、大都市の空間的拡大について分かりやすく図示されており良問であるとの評価もあった。大問全体としては、地球的課題から資源・エネルギー、食料、人口、都市・居住の諸課題についてバランスよく出題されており適切であるという評価を受けた。地球的課題についてはバランスよく出題することができた一方で、世界の結び付きが意識された小問が見られなかったという指摘もあった。設問数や分量の増加に注意しつつ、世界の結び付きを題材とした地球的課題の小問を盛り込むといった工夫に努めていきたい。

第5問 全体としては、地域調査についての必要な技能が順に明確に示されることで、単なるテスト問題にとどまらない一連の地理学習の流れともなっている良問であるという評価を受けた。また長めの文章が少なく時間がかからず解答できる点も評価されている。問1は、地理院地図と空中写真から地形及び土地利用の様子を判読する問題であり、地理学習の中でも最も基礎的かつ必要な技能を問う問題であるとの評価を受けた。問2は、人口集中地区と福岡市への通勤・通学率を示した主題図を読み取る技能を問う問題である。難易度はやや易であるものの、授業においてGISを一層活用することを示唆する問題であるとの評価を受けた。問3は、広域中心都市としての福岡市の産業の特色に関する問題であり、地域調査の重要な技法の一つである聞き取り調査の場面設定となっている。難易度は標準との評価を受けた。問4は、福岡都心から郊外に向かっていく際の景観写真の資料をもとに、都市の内部構造について人口増加率と老年人口増加率の経年変化を考察する問題であり、都市圏における景観の移り変わりについて読み取る良問という評価を受けた。問5は、地理院地図を手にして行った現地での観察についての会話文から埋め立て地の土地利用の特徴を読み解く問題である。資料活用の点で出題に工夫が求められると評価される一方で、地形図情報を日常的に活用していくことを示す出題として意義があるとの評価を受けた。問6は、日本の人口移動について、福岡市への転出入の状況を主題図から読み取って考察する問題であり、福岡の地域調査というスケールから日本全体にスケールを変化させながら考察させる問題である。スケール変化を利用した考察は地理学における重要な観点であり、良問であるとの評価を受けた。全体として地域調査らしい良問との評価を受けたが、新たな主題形式や図表等の活用も含め、適切な地域調査の問題を追求していくことが必要である。

#### 4 今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 「地理A」の学習内容におおむね合致しており、豊富な地図資料に加え、生徒が作成した資料等を用いた学習プロセスに沿った出題が評価された。また、知識偏重ではなく、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くよう工夫された出題がなされている点についても評価された。一方で、単純な図表の読み取りや、前後の文脈で容易に解答に至ることのできる出題も散見されるという指摘も受けた。高等教育への影響を鑑み、また教科書の内容も踏まえ、求められる知識水準の共

有化を進めるとともに，知識定着や地理的技能の活用，更に地理的な見方・考え方の応用といった各側面を総合的かつ適切に問えるよう，今後の問題作成でも継続して留意する必要がある。

- (2) 難易度については，平均点は61.75点で，昨年度と比較して上昇し，「世界史A」や「日本史A」と比較すると高かった。ただ，高等学校教科担当教員・教育研究団体等からも評価されたように，難易度としては適正であったと考える。今後の問題作成の際にも適正な難易度について十分留意したい。
- (3) 出題範囲については，基礎的な知識・技能とともに思考力・判断力・表現力等が適切に問えていると評価された一方で，資料の読み取りに時間がかかりすぎる出題があることについても指摘がなされた。地図・主題図・模式図・写真を活用した出題や，それらと図表を組み合わせた出題については，出題意図の伝達や情報の読み取りやすさも含め，今後も重要課題として検討したい。
- (4) 全体として，高等学校教科担当教員・教育研究団体等からは指導要領の趣旨に沿った問題作成であるとの評価を受けた。今後も，作業的，体験的な学習を通じて地理的な技能や思考力・判断力・表現力等を養うことを重視する「地理A」の内容に即した問題作成を継続していきたい。

## 地 理 B

### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。地理的な見方や考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求める。問題の作成に当たっては、思考の過程に重きを置きながら、地域を様々なスケールから捉える問題や、地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題、系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題などを含めて検討する。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 本問は、学習指導要領(2)「現代世界の系統地理的考察」における「ア 自然環境」に関する学習プロセス型の大問である。中間Aで土砂災害、Bで森林分布をそれぞれ題材に取り上げ、様々な資料から多面的・多角的に自然環境の地域的特色を見出す力を問うた。問1は土砂災害発生地域に注目し、急峻な高地を形成する地殻変動に関して、プレート境界型とそれに応じた地形断面の特徴や火山分布を思考させた。問2では土砂災害発生地域の分布図を示し、大雨をもたらす赤道低圧帯や熱帯低気圧、季節風の分布とその季節変化を問うた。問3では河川の土砂流出量を抑制・促進する人為的要因やその影響を考察させた。問4は森林分布の疎密について、地形や気候などの自然環境要素とも重ね合わせて分布の特徴を検討させる問とした。問5は熱帯雨林、温帯林、亜寒帯林の植物中と土壌中の炭素量の割合を素材に、森林と土壌の構造的特徴を結び付けて考察できるかを問うた。問6は森林火災を取り上げ、火災の発生しやすい気候条件と、カナダの亜寒帯林の特徴から森林火災の危険性を予報する意味について問うた。大問全体の得点率は標準的であったが、問2、4、5の得点率が低かった。

第2問 本問は、学習指導要領「地理B」の「(2) 現代世界の系統地理的考察」における「イ 資源、産業」に関する大問である。諸事象の空間的な規則性、傾向性やそれらの要因などを系統地理的に考察させること、すなわち、経済地理学の研究成果をふまえ、産業立地の原理を考察し、従来の地誌的知識を理論的な視点から捉えなおすことを目的とする。問1は、農業、工業、商業の就業者と地域人口の相関関係をグラフから考える出題であり、特徴が明瞭に表れていることからやや易しい問題となった。問2はチューネンの「孤立国」に基づき農業立地の理論を考察させる問題であり、概念の抽象度は高いものの選択肢は単純であった。問3は東日本の14都県を取り上げ、市場からの距離および土地生産性と土地利用の規定関係を考える問題であり、解答には何段階かの思考を要する。問4は市場への距離と産業立地との関係を製造業やサービス業の分野へ拡張する出題である。問5は貿易における垂直分業や水平分業と補完性原理を考える問題であり、事例3か国の貿易依存度と対日輸出品を組み合わせる形式が複雑だった。問6は中国、韓国、米国の訪日観光客の消費額のグラフから観光目的や滞在日数などの違いを読み取る問題であった。大問全体の識別力は高かった。

第3問 学習指導要領「(2) 現代世界の系統地理的考察」の「ウ 人口、都市・村落」に相当する大問である。国家、都市圏、都市内部・村落という様々なスケールの地理的事象について、グラフや主題図、空中写真など多様な資料を用いて、大学入学共通テストで問いたい地理的な思考力・判断力・表現力等を多面的に問うた。問1は、高齢化の進展状況の国別の差を考える設問である。問2は、女性の年齢階級別労働力率の国別の差について、教科書記述を踏まえて考

える設問である。問3は、田村の空中写真を題材として、集落の立地、および集落の形態が有する機能について考える設問である。問4は、都市人口率の動向と経済情勢についての理解とを組合せて考える設問である。問5は、大都市とその周辺地域において、交通網の整備状況などと関連して、地区間の移動とその移動手段の関連を考える設問である。問6は、都市に数多く立地する各種の施設の立地特性について、都市の空間構造との関係を考える設問である。問全体でみれば、識別力は適切であった。

第4問 本問は、学習指導要領「地理B」の「(3) 現代世界の地誌的考察」における、「イ 現代世界の諸地域」に関する大問である。具体的には、西アジアにおける自然環境、人間活動、および社会状況を取り上げ、主題図や写真、折れ線グラフなどの資料から、多面的・多角的に地域的特色を見いだす力を問うている。あわせて、対象地域とそれ以外の地域について、ヨーロッパと接し周辺諸国から影響を受けてきた地域に注目し、当該地域の共通性や差異性をとらえ、その要因を考察する力を測ることを目的としている。大問の内容としては、西アジアにおける気候の地域差、乾燥地における水確保の方法、各国の経済水準や産油依存の構造、国際金融センターとしての都市の急成長、比較地誌として、ヨーロッパと海峡を接するトルコと北アフリカのマロココの自然・文化の共通性と差異性、両国の移民送出及び難民受入についての6つの小問で構成している。「(1) 様々な地図と地理的技能」で学習した成果を活用して上記のテーマを考察できるように、単純な知識を問うのではなく、さまざまな形式でのデータの読み取りと分析から地域の特徴を考察させる作業を、小問中に含めている。大問全体には適切な識別力があつた。

第5問 本問は、学習指導要領「(1) 様々な地図と地理的技能」の、主として「イ 地図の活用と地域調査」に関わる大問として、福岡市とその周辺地域を対象として取り上げる形で出題した。各教科書で詳述されている、地域調査の一連の流れ（調査立案・調査前の下調べ⇒調査実施⇒現地での新たな知見）を辿るように小問を配置し、主題図作成や地形図読図など他項目で身につけた「地理的技能」を活用することを意識している。全体を通して、福岡市の地形的な特徴と都市圏の広がり、広域中心都市としての産業構造の特徴、都市圏内における景観と機能の違い、臨海部における都市開発、日本全体のスケールにおける地域のつながりについて、高校生が調べる範囲で一定の時空間的なスケールを踏まえつつ様々な観点から考察することを念頭においている。第1問全体でみれば、識別力は適切であった。本問は「地理A」との共通問題であるが、特に「地理B」受験者の得点の方が極端に高いということはなく、受験者の地域的な有利・不利の差もみられなかった。

### 3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 授業での探究活動が想定されており、様々な資料の読解や地理的思考力が問われた大問との評価であった。中間Aは仮説検証の形式をとったことを評価されたが、導入で終わっているとの指摘も受けた。問1は地形断面図からプレート境界の特徴を問うもので、陸上のみでなく海底も含めて断面図を示した点は評価された。問2は土砂災害発生日の地図を判読し、基礎的知識をもとに解答させる問いとの評価を受けた。問3は歴史的背景も踏まえて土砂流出量の変化を考察する良問との評価もあったが、カードで示す効果については疑問も呈された。中間Bは探究的な問いに仕上がっているとの評価であった。問4は難易度が高いものの、森林分布を題材に自然環境を多面的・多角的に考察していく良問と評価された。問5は馴染みのない森林の炭素量が扱われていたため、選択肢の正誤判断が難しかったのではないかとの指摘があった。問6は時事的な話題である森林火災を多角的に考察させる問との評価であったが、難易

度や出題形式について考慮が必要との指摘も受けた。今後、分布図の図法・表現についてもさらに考慮した上で、思考力を問えるような問題作成に努めたい。

第2問 産業と貿易に関する大問。初見の図やデータを読み取る技能や地理的知識を用いた思考力が試される良問が多いとの評価を得た。問1のグラフは第1次～第3次産業の特徴がよく示されており、学習現場での教材としても有用であるとの意見があった。問2と問3は農業立地に関する理論的な図式と現実の分布を結び付けるもので、工業立地を扱った共通テスト(1)の第2問の(問3・問4)と対をなす。問2は抽象度が高いチューネンの仮想モデルを正面から問う点で新規性が際立つが、空間的法則について思考を促す重要な出題といえる。問3は中学地理で学習する日本の農業地域の形成メカニズムとしてチューネンモデルを適用するという斬新な切り口で、共通テストが目指す地理的思考力のあり方について強いメッセージが感じられるとの評価を得た。問4は市場への近接性から産業立地の事例を判断するもので、短文の4択という出題形式は前問に比べて単純で知識問題との印象を与えたかもしれない。問5は3か国の経済構造と対日輸出品を組み合わせる形式で、多角的な思考を必要とする良問であるとの評価を得た。問6は訪日観光客の動向に関する問題で、新型コロナウイルス感染拡大に伴う入国規制という状況と重なったため時期的に適切か懸念が示されたが、観光産業の発展と外貨獲得の重要性を考えると出題をためらうべき理由はないと判断した。

第3問 本大問について、多様な資料を読み取る技能と知識を組合せて思考する力を問うており、標準的な難易度と評価される一方、知識・技能を問う問題が多いとの指摘もあった。各小問について、問1は、老年人口に関するシンプルな出題で、選定された国もわかりやすいものの、やや難しいと評価された。問2は、女性の年齢階級別の労働力率について、各国の知識を踏まえて考察する力が求められ、標準的なレベルと評価された。問3は、円村の特徴について、散村との対比から思考させることを意図したが、知識問題であると指摘された。問4は、都市人口率の推移と社会経済的状況を示した文との組合せで、国名を伏せた点が新形式であり、各地誌の知識も必要で、系統地理と地誌を関連付けた出題との評価を受けた。問5は、大阪府における鉄道と自動車の移動と昼夜間人口比率に関する問題で、初見の図を見て都市構造を思考・判断させる工夫された良問であると評価された。問6は、県庁所在地中心部の3種類の施設の立地を考察する問題で、空間的思考を問う良問と評価された。知識・技能を前提としつつ思考力・判断力・表現力等を問える問題作成を引き続き検討したい。

第4問 全体として、自然、産業、文化、時事的な問題がバランスよく盛り込まれ、基本的な知識に加えて、思考力等を適切に問うているとの評価を受けた。問1は、緯度、隔海度、標高など多くの気候因子を組合せて順序立てた思考ができるかがよく測れる良問であるとの評価を受けた。問2は、各地点の自然環境や灌漑方法、各国の経済状況などの基本的な知識を問うているとの評価を受けた。問3は、象限で分けられた図を使用することにより、各国の人口、経済状況、原油生産量などの知識を多面的・多角的に考察しているかを測ることができる良問との評価を受けた。問4は、素材の資料は興味深い、基本知識で解くことができる易問との評価を受けた。問5は、両国の気候の違いや食文化の理解をふまえた、地理的思考力を試す良問との評価を受けた。問6は、人口の国際移動の背景について、国家間の歴史的関係や地理的近接性、時事問題を踏まえて多角的に考察できているかを問う良問との評価を受けた。今回は地誌の大問中に比較地誌を盛り込むことで、比較を通じて対象地域の特徴を浮き彫りにできたと考えられる。今後も比較地誌を絡めた地誌の大問の有効な問題作成を検討したい。

第5問 全体としては、地域調査についての必要な技能が順に明確に示されることで、単なるテスト問題にとどまらない一連の地理学習の流れともなっている良問であるという評価を受け



た。また長めの文章が少なく時間がかからず解答できる点も評価されている。問1は、地理院地図と空中写真から地形及び土地利用の様子を判読する問題であり、地理学習の中でも最も基礎的かつ必要な技能を問う問題であるとの評価を受けた。問2は、人口集中地区と福岡市への通勤・通学率を示した主題図を読み取る技能を問う問題である。難易度はやや易であるものの、授業においてGISを一層活用することを示唆する問題であるとの評価を受けた。問3は、広域中心都市としての福岡市の産業の特色に関する問題であり、地域調査の重要な技法の一つである聞き取り調査の場面設定となっている。難易度は標準との評価を受けた。問4は、福岡都心から郊外に向かっていく際の景観写真の資料をもとに、都市の内部構造について人口増加率と老年人口増加率の経年変化を考察する問題であり、都市圏における景観の移り変わりについて読み取る良問という評価を受けた。問5は、地理院地図を手にして行った現地での観察についての会話文から埋め立て地の土地利用の特徴を読み解く問題である。資料活用の点で出題に工夫が求められると評価される一方で、地形図情報を日常的に活用していくことを示す出題として意義があるとの評価を受けた。問6は、日本の人口移動について、福岡市への転出入の状況を主題図から読み取って考察する問題であり、福岡の地域調査というスケールから日本全体にスケールを変化させながら考察させる問題である。スケール変化を利用した考察は地理学における重要な観点であり、良問であるとの評価を受けた。全体として地域調査らしい良問との評価を受けたが、新たな主題形式や図表等の活用も含め、適切な地域調査の問題を追求していくことが必要である。

#### 4 今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 「地理B」の学習指導要領の目標と内容に沿っており、系統地理の各分野について幅広く問う内容となっており、事例として取り上げられる地域についても偏りが無いとの評価を得た。その一方で、資料数や文字数が多く、読み取りや因果関係の把握・考察に時間を要する出題も散見されるとの指摘もあった。分野間のバランスや資料・出題形式のバランスのほか、他科目との出題内容の重複に注意しつつ、資料の分量や難易度に配慮しつつ、引き続き問題作成を行っていきたい。
- (2) 難易度については平均点が62.72点で、昨年度と比べて3.1点高かった。また、「世界史B」よりも高かったものの、「日本史B」とほぼ同程度の結果となり、難易度としては適正であったと考える。また、センター試験の際と同様に、「地理B」では標準偏差が小さく、高得点を得にくいとの指摘を受けた。「世界史B」や「日本史B」との難易度調整にも配慮しつつ、引き続き適正な難易度の問題作成を目指したい。
- (3) 地図をはじめとした多様な資料を活用した出題が評価される一方で、資料数の多さやその読み取り難さについて指摘があった。また、写真の判読性の改善やカラー化に関する要望が本年度もなされた。これらの課題について、今後も継続して検討を重ねていく必要がある。
- (4) 出題のバランスについては、全体的に高等学校で学習した知識、技能、地理的な思考力・判断力・表現力等を問う出題になっているという評価の一方、センター試験と比べて比較地誌の出題が減ったことによる分野的な偏りに関する懸念も示された。ただ、学習プロセスを設定した出題など、資料を基に因果関係や相互関係を考察したり、理論と現実的な地理情報との関連について考察したりする出題が増加しており、今回のような比較地誌的な出題形式が、今後の参考になるといえる。
- (5) 全体として、高等学校教科担当教員・教育研究団体等からは学習指導要領の趣旨に沿った問題作成であり、高等学校の学習範囲に沿って、地理の基本的な知識を問う問題から、地理的な見方・

考え方及び地理的技能を基にした考察力や思考力を必要とする問題まで幅広く包含したバランスの取れた問題と評価されたといえる。次年度以降も、地理的な思考力・判断力・表現力等を多面的かつ多角的に問うことのできる内容で、かつ適切な難易度・分量で出題する努力を継続していきたい。